

地域学研究会 第9回大会

地域課題と知のクロス

「私」と「地域学」

基調講演：内山節*，パネルディスカッション：藤田安一**，畑千鶴乃***，
福井恒美****，川井田祥子****，竹内潔*****，新谷陽香*****，盛田実優*****，
飯田菜生*****，釜田朋夏*****，小林あまね*****

The 9th Annual Meeting of
the Tottori University Association for Regional Sciences:
From Self to Regional Sciences

UCHIYAMA Takashi*，FUJITA Yasukazu**，HATA Chizuno***，FUKUI Tsunemi****，
KAWAIDA Sachiko****，TAKEUCHI Kiyoshi*****，SHINTANI Haruka*****，
MORITA Miyu*****，HIDA Nao*****，KAMADA Tomoka*****，
KOBAYASHI Amane*****

キーワード：地域学，地域学のフィロソフィー，身近な小さな変化，いのちと関係

Key Words: Regional Sciences, Core Philosophy of Regional Sciences, Familiar Local Changes, Life and Relationships

I. 開会

開会挨拶

藤井 正（地域学研究会会長・地域学部長）

皆さん、おはようございます。本日は、地域学研究会、もう第9回になります大会を企画いたしましたところ、朝早くからたくさんお集まりいただきまして、ありがとうございました。私は、地域学研究会会長と今紹介をしていただきましたが、この研究会についてまず簡単に紹介させていただきます。地域学部ができたのは2004年になります。もう14年前になるのですが、そのときに地域学という新しい学部を展開するにあたって、そのベースとなる教育研究を進めるために研究会をつくらうということになりました。

学部に、例えば教務であったり、総務であったりという委員会がございますが、それと同じ扱いでいただいておりますが、学部長が会長になるという形で、実際には学部の必修授業とかの企画を通して、色々な方に来ていただいて、話をさせていただく。その展開として、今日、内山先生に来ていただいたこういう大会というものを企画しているという形になっております。

今は地域系の学部は随分たくさんあちこちの大学にできてきましたが、2004年に地域学部ができたとき、我々に先行するのは国立大学では岐阜大学に地

* 哲学者

** ゆりかご保育園園長，鳥取大学名誉教授

*** 鳥取大学地域学部地域学科人間形成コース・准教授

**** (株)鳥プロ・CEO，リアルマック・代表，IJU 大学・代表

***** 鳥取大学地域学部地域学科国際地域文化コース・教授

***** 鳥取大学地域学部地域学科地域創造コース・准教授

***** 鳥取大学地域学部地域学科国際地域文化コース・1年生

***** 鳥取大学地域学部地域学科地域創造コース・1年生

域科学部がその6年前にできていたぐらいでした。しかしながら、今はたくさん地域系の学部が、最近のものは地方創生と大学改革という背景でつくられているわけです。また、地方創生という動きのような、最近の政治的な動きもあるわけですが、地域を志向する、地域を重視するという流れは、もっと大きな時代の転換であると我々は考えました。そのために新しい地域学部というものをつくっていき、そこで地域に関する、地域課題に関する研究や人材育成をしていきというふうに考えて立ち上げたわけです。ですので、我々の学部では地域学に関する比較的理論的な研究というものも進めてまいりました。

『地域学入門』という本を7年前、東日本大震災の年に出しております。それは学生の皆さんの学部必修の教科書にもしているものですが、そういった理論的な研究も進めてまいりました。

もちろん、人材育成としては地域での実践的な教育、地域の方と連携した教育、これも新たに開拓していく分野であったわけですが、それも進めてまいりました。最近ではアクティブ・ラーニングであったり、ほかの大学の地域系でも色々な試行錯誤、あるいは展開が、そういった教育についても行われているところかと思えます。

本日は、基調講演に内山節先生においでいただきました。内山先生は、先ほどちょっとお聞きしたのですが、お住まいは群馬県の山のほうの上野村というところで、でも東京の大学でお仕事をされているということで、どれぐらいのペースで行き来されているのかとお聞きしたら、3分の1が上野村で、3分の1が東京にいて、あと3分の1は移動していますねというお話でした。今日も移動して来てくださったわけですが、やはり東京から来られたのではなくて、広島、山口とまわって来られたとおっしゃいました。内山先生は、森づくりのフォーラムとかの理事もされていて、山の村で森に深くかかわった活動もされています。もちろん御紹介にありますように哲学者でいらっしゃいますので、理論とそういった実践、まさに「私」と「地域学」という本日のテーマにふさわしい基調講演の先生をお迎えできたかなと考えております。

今日の午後はパネル発表、パネルディスカッションといたしまして、藤田先生、藤田先生は地域学部の名誉教授でいらっしゃいますが、御定年後、御専門は経済ですが、小規模保育園をご自宅で始められて、地域の活動に転じられていらっしゃいます。それから、倉吉からは福井様においでいただきまして、

福井様は、私も倉吉でちょっと地域活動、住民の活動にかかわったりしておりますが、前にも色々な、倉吉は色々な活動している団体がありますが、そういうのと一緒にシンポジウムなどもしたこともございましたが、移住カフェとかそういった地域活動を展開されていると聞いております。

それから最後に、今年学生が豊岡市にフィールドワークで参りました。豊岡もコウノトリの野生復帰の活動を初めとして、最近では平田オリザさん、平田さんもこの大会で、3年前ですか、御講演いただきましたが、劇団を連れてやって来られるということで、演劇コミュニケーションの活動なども展開されています。「地域学入門」という必修授業で、中貝豊岡市長に御講演をお願いし、そのときに「小さな世界都市」という豊岡市のコンセプトのお話を頂きました。世界につながるのとは別に東京経由でなくても小さな都市からでも世界につながる、インターネットの時代ですから当然そういうことになります。インターネットを通して世界から、例えばアートの活動家が豊岡にやってくる、実際にそういう活動を展開されているあたりのお話でした。それを実際に地域学部の学生が現地で見ると、話を聞くためにフィールドワークというのをいたしました。その報告も、今日パネル発表の最後に行われるというふうに聞いております。



また、御後援いただいている鳥取県からは、地域振興部の文化振興監でいらっしゃいます池上祥子さんに来賓でおいでいただきました。後ほど御挨拶をいただきますが、全国に地域系の学部というのは、今は協議会をつくっているの、国立大学の協議会に参加している大学で10大学ございますが、その中ではアートがひとつの柱になっているという地域系の学部はそんなに多くはございません。その意味で、地域学部は芸術文化センターを持っておりまして、

発足当初から地域とアートというものの結びつきを一つ柱にしてやってまいりました。その点でも池上様にいろいろ御支援をこれまでもいただいているかと思しますので、御礼をあわせて御紹介をさせていただきたいと思っております。

そういった時代の転換の中で、地域志向が進む中で、鳥取大学全体でも地域の拠点大学としての戦略、方向づけが今とられています。これについては、次に御挨拶いただきます法橋理事のほうから御説明があるかと思っておりますが、そういった地域志向の時代になってきた中で、14年たった地域学部もさらに色々考えて、検討して、色々な方に教えを請いながら、さらにブラッシュアップをしていきたいと考えております。

本日夕方まで、長い時間になりますが、どうぞ、ひとつよろしく願いいたします。

来賓挨拶

池上 祥子（鳥取県地域振興部文化振興監兼文化政策課長）

皆さん、おはようございます。本日、地域学研究会第9回大会が、このように多くの皆様の御参加のもと開催されますこと、お祝い申し上げます。これまで尽力してこられました藤井学部長様はじめ、大学関係者の皆様に敬意を表しますとともに、地域の課題の把握と解決に向けた研究、そして、地域での実践に基づく教育を展開していらっしゃることに深く感謝申し上げる次第でございます。

本日は「ここに生きるーいのちの場所を求めてー」と題する内山節様の御講演、これまで森や自然にかかわる独自の思索と実践を積み上げてこられた内山先生の御講演があると伺っています。少子高齢化や環境問題、AIの進歩など、社会の状況が大きく変化する中で、私たちが住むこの地域をよくするには何が必要なのか、そして生きることの根本は何かといったことなど、示唆に富んだお話を伺えるものと期待しております。

また午後には、地域の課題に向き合い、取り組んでおられます藤田様、そして福井様、また豊岡市の実践を学んでこられました皆様のお話が伺えるということで、内山先生の「ここに生きる」というお話を、また異なる角度から深めていく機会になるのではないかと楽しみにしております。

鳥取県では、先ほどの御挨拶で文化の話がございましたが、県内あらゆる場所でアートの花が開く創造性と活力に満ちた地域を目指しています。その一

つとして、県外や国外のアーティストの方が鳥取の地を訪れ滞在し、豊かな自然、制作環境の中で地域の方と一緒に交わりながら、アート活動をされるような取り組みも進めており、地域との交流が深まる中で、鳥取の地に魅かれて移り住まれたり、また、繰り返し訪れてくださる方も増えています。

引き続き、大学関係者の皆様、そして地域で活動に取り組んでおられる様々な団体の皆様と一緒に、鳥取の地域がさらに活気づくよう取り組みを進めてまいりたいと思っております。

結びになりますが、本大会が御参加の皆様にとって実り多い大会となりますこと、そして、御参加の皆様の御健勝と御活躍を祈念いたしまして、御挨拶とさせていただきます。本日は、誠にありがとうございます。



理事挨拶

法橋 誠（鳥取大学地域連携担当理事）

皆さん、おはようございます。3連休の中日ということで、しかも午前中からの大会ということで、非常にお出かけにくいところをお出かけいただきましてありがとうございます。小春日和というのですか、非常に爽やかないい天気になって、日差しがとても温かそうな感じで、教室の中にいるのもったいないなという感じもします。

この地域学研究会の大会、9回ということになります。私も鳥取大学に来てから6年がたちます。それまでは鳥取県庁で仕事をしておりまして、退職ちょっと前に来させていただきまして、早いもので6年ということになりました。毎年この大会に参加させていただいております。毎回、本当にとてもチャームングな講師の方を招聘されて、非常に充実した大会が毎年できているかなというふうに思っております。

今年は内山節先生に来ていただきました。皆さんもよく御存知なのではないかなと思っております。

インターネットでずっと見ていましたら、どうも地域学部の入試にも内山先生の文章が使われているということがあって、今日も学生さんがたくさんおいでになっていますが、内山先生の文章が問題に出て、それをきちっと解答して、ここにおられるという学生さんがたくさんおられるのではないかなと思って、鳥取大学に限らず、大学の入試に内山先生の文章が随分使われているようであります。それだけ内山先生の思想、哲学というものが今の時代に非常に必要とされている、大学に入って行く学生さんの資質、能力という面に関して、非常に内山先生の考え方というのがやっぱり必要とされているということの証左かなというふうに思ったところでございます。

それから、藤田先生には大変長年鳥取大学でお世話になりました、今、保育園の園長さんですか、園長さんになられたということで、久しぶりにお会いいたしました。

福井さんにつきましても、非常に倉吉で地域づくりのことで、お世話になっているところでございます。

藤井先生からは、運営費交付金の戦略3の話をしろというお題を出されますし、司会からは短くしろと言われますし、なかなか短くこの戦略3の話をするというのは非常に難しいのですが、今、国立大学は、国から本当に色々な形で、いじめられていると言ったら変ですが、文部科学省自体が霞が関の中では色々なこともあって、非常に肩身の狭い思いをしているということでございます。

それで、大学を運営するにあたっては非常にたくさんの方の教員の方にお給料も払わないといけませんし、研究費も要するというので、非常に多額な経費がかかります。国立大学時代はそんなに潤沢でなくても、それなりに基礎的な研究もやっていたようなお金というのが、国から来ていたということです。もう十数年前に法人化されてからも運営費交付金という比較的自由に使えるお金が来ているのですが、これが財務省からすると、地方交付税交付金などと並んで非常に多額なことがあって、国が苦しんでいるのにそっちのほうは自由に使っているのではないかという論法で、非常に厳しく査定をされているという現実があります。それで、そこに競争原理を持ち込まなくてはいけないのではないかと、競争せずにぬくぬくとそういったものを使っていたらだめではないかという財政の論理でもって、国立大学もどんどん競争させましょうという動きが出てきています。

運営費交付金をどんどん削減して、競争的な分野、競争的な部分に充填しましょうということで、それがどんどんどんどん拡充していっています。大学も戦略を練りなさいということで、中期計画期間という6年間ごとの計画期間ごとに、戦略にのっとって大学を特色ある大学にしていきなさいということが出てきています。

その前に、国立大学を3つのカテゴリーに分けましょうということで、研究大学と言われますように世界に伍して戦える大学、それから、ある特定分野では非常に特徴的なことをやっていくような大学、単科大学なんかかそういうことになりますが、それとあと、ほとんどの大学は地域のために色々な教育とか研究をやっていく大学、こういった3つのカテゴリーに分けましょうということで、鳥取大学はその最後に申しあげました地域のための大学というカテゴリーに入っているわけでございます。これは鳥取大学がそういうことを選択して、そこに重点を置いた活動をやっていきましょうということで、我々が選択したということでございます。

その中で、3つ戦略を立てております。1つは皆さん御存じのように、鳥取砂丘をフィールドにした乾燥地研究というのが、非常に世界的に成果を上げておりますので、これを一つ中心にしていこうということです。それから医学部の臨床医学の関係と工学部、農学部の科学的な技術開発力を融合させようというのが、2つ目の戦略です。そして3つ目の戦略が、こういう過疎地といいますが、人口が非常に少ない地域でどういう持続的な社会をつくっていくのかということを研究、教育の素材にしましょうというのが3つ目の戦略ということで、鳥取の地、山陰の地という、日本の中でも特に人口の少ない社会の中でどういうふうに持続的な社会を形成していくかの方法論とか考え方、そういったものをこの鳥取大学の中で研究、教育していき、それを全国に波及させていく、そういったことを考えておるわけでございます。

それでこの地域学というもの、地域の戦略というもの、これは今一つのブームになっていまして、藤井先生からもさっきお話しいただきましたが、たくさんの方の大学が我々の後についてきているという状態でございます。

ところがもう片方では、これは本当かうそか私もうわさ話でしか知らないのですが、一番先鞭を切った岐阜大学では、地域科学部というものを経営学部で改組していこうという動きがどうもあるようでござ

ざいます。よその大学のことでですから、あんまり申し上げにくいのですが、やはり未だに地域社会の中で経済的成長という幻想を追いかける、そういった動きというのが底流として流れているのかなとつくづく感じます。

経済的な成長というのは、日本の中でも人口がどんどん増加する中であって高度経済成長ということをやって今の社会を築いたわけですが、そこにはたくさんの方の負の部分というものがあります。それを我々は克服していくということで、これから本当に人間の幸せって何だろう、ということが豊かな生活で、ということが人の幸せなのかということの本当は地域の中で考えていく、こういったことが今必要になっている時代なのではないかとは思いますが、やはりまだまだ、貨幣的な価値というものを追い求めるという、そういった部分というのはなかなか抜き差しならない状態になっているのかなということで、そういった2つの流れというものが大きく交差しながら、いろんな形で脈動しながら、これからの世の中というものをつくっていくということだろうと思います。今たくさんの方の若い方がおられますが、これからの社会を形成していくにあたって、そういったことについてしっかり考えていかないと、やっぱりこれからの道を大きく誤ることにもなるかなというふうに思っております。

そういった事柄を大会を通じてしっかり考えていただく、自分事として地域ということを考えていくということが恐らく今日のテーマになっているのかなというふうに思います。

ちょっと長くなって司会が大分焦っているようでございますので、この辺にしますが、今日一日じっくり地域社会のこと、自分の生活のことを考えていただくことをお願いいたしまして、私の御挨拶とさせていただきます。どうも、今日は本当にありがとうございました。

趣旨説明

中原 計（地域学研究会副会長）

皆様、おはようございます。地域学研究会第9回大会のテーマといたしましては、前に掲げていますように、「私」と「地域学」とさせていただきます。これまでの地域学研究会の大会のテーマからすると、少し抽象的なテーマが設定されておりますが、特に難しいというわけではなく、地域にかかわっている私たちそれぞれが自分の目でその地域を見、そ

こでの暮らしを豊かによりよくしていこうという方向へ考えて実践していくという思いを持って、本大会のテーマを設定しております。

それぞれ地域で考えて実践していくというのは、我々大学にいる教員だけではなくて、行政の方、地域住民の方、何か資格を持った人とか、肩書を持った人だけがそういうことを行うというわけではなく同じような思いを持っている人みんな実践していくと、そういうところが今回のテーマの中に含まれているということです。

また、地域というと、地方のような捉え方がされますが、地方や都市部の分け隔てなく、さまざまな地域でそれぞれ同じように地域の暮らしを豊かにしていこうという考えを持って実践していく、そのために「私」と「地域学」ということをテーマとして設定しているということになります。

本日のプログラムといたしましては、午前中は、先ほども御説明がありましたように、内山節さんに基調講演をいただきます。その後、午後からは藤田先生と福井さんにそれぞれ地域でどういう取り組みをされているか、どういう思いを持って取り組みをされているかという具体的なお話をいただき、また、本学部の教員と学生が同じように地域で取り組みをされている豊岡市で、フィールドワークを行って来ましたので、その成果を発表します。このフィールドワークは地域での取り組みを第三者的な視点で見つめて、客観的に捉え直しつつ、自分たちの周りにある課題というのを見つけて、解決していく力を養ってもらうことを目的に行っています。それら3本の発表を行った後、総括セッションを行い、まとめとなります。

また、会場の入り口付近と、入り口を出てすぐのところのリフレッシュルームでポスターセッションも行っておりますので、そちらのほうもお時間が許す限りごらんいただこうと考えております。

以上、本日一日、皆様と学び合って考えていくなから、暮らしの場を見つめて、より豊かにしていこうという思いを酌み取っていただければと思います。以上で、私からの説明を終わらせていただきます。ありがとうございました。

Ⅱ. 基調講演

「ここに生きる

—いのちの場所を求めて—

内山 節（哲学者）

僕は子どものときから魚釣りをやっておりました。群馬県の上野村というところに、今からもう50年近く前から、ヤマメとかイワナの魚釣りに出かけていました。何となくこの村が気に入って、以降、東京にいたり上野村にいたりという、大体そういう生活を続けてきています。ただ、もう50年近いですので、すっかり上野村の住民という感じで、いつも暮らしております。

今日は上野村の報告に来たわけではないのですが、上野村というのは8月になりますと、日航機が墜落したというニュースが入ってくる村です。今の人口は1,200人程度です。そのうちの22~23%ぐらいはいわゆるIターンという方々なので、比較的Iターンの多い村です。

山村の中では比較的健闘していて、といいますのは、明治になって上野村ができてから、上野村は1度も合併したことがありません。ですから、1,200人という数字も多くはないが、少ないわけでもないように思っています。上野村ができたときの人口は大体1,000人です。僕らも1,000人ぐらいいけばいいのかなという、そんな気持ちも持っています。

むしろ最盛期、人口的に一番多かったときというのは、村が過剰人口を抱えたといってもいい時期といえます。1つは炭焼きの人たちがたくさん入ってきた。炭焼きだけで1,500人ぐらいいた時期があります。炭焼きの方というのは、村で暮らしている方が傍ら焼くというのがあるのですが、村で暮らしている人というのはいろんな仕事を持っていますので、炭ばかり焼いているわけにはいかない。一年間炭ばかり焼いている人というのは、山の木を借りてという言い方をよくしますが、外から入ってきて、炭を焼くのに都合のいい木の伐採権をもらって、その木で炭を焼く。木の代金として焼けた炭の大体半分を置いていくという感じの人たちです。そういう人たちが多かった時期というのは、戦後、東京などの大空襲で疎開して来た人が大変多い時期でした。最盛期というのはそういう時期ですから、山村としては過剰人口抱えた。そう考えると、上野村は今ぐらいの人口でいいのかなと考えています。

ただし、その数字で持続できるかどうかというのが大問題です。明治から一遍も合併しなかった上野村というのは何が何でも合併が嫌いな村なので、今でも上



野村農協があり、上野村森林組合があり、上野村全体で1つの共同体を守っていこうというそんな雰囲気です。ちなみに、山村の中では比較的健闘しております。出生率が今、2~3%ぐらいです。1,200人という村ですと、新生児が1年に1人とか2人とかそういう村が多いのですが、うちの村は大体10人ぐらい生まれていて、その数字でいけば何とかかなと思っ

ています。もう2年ぐらい前ですが、村の教育委員会が村の中学生の意識調査というのをやったときがあって、その調査項目の中に将来どこで暮らしたいかという質問項目がありました。関東の村ですから、やっぱり過半数は東京とか、あるいは同じ群馬県内でも高崎などの都市部とか、今の時代だとニューヨークとか言ってくる人もいそうです。だから、どうなるのかなと思っ

て見ましたら、100%上野村と答えている。これには僕らもびっくりしまして、これは本当かいなという話になったのです。今はそんな雰囲気の村なのです。子供たちも本当に100%残るかどうかが怪しいですが、この村の暮らしが一番いいよねというような、そういう雰囲気があることは確かです。何とかそういうものを維持していければというふうに思っている村ではあります。

ただ、うちの村は山村の中でも山村で、歴史的に水田を持たないという村です。山しかないといってもいい。日航機の墜落のニュースを見てもらえ

ればわかるとおりですが、村の96%が森林です。ですから、昔は山の下の方を桑畑にして養蚕中心で暮らしていた村

でした。ですが今は、養蚕はちょっと無理な状況です。なので今はキノコの出荷量が一番多いです。うちの村はキノコを4億円ぐらい、年間出荷しています。1,200人の村に4億円というのは大産業なので、何とか持続させないとまずいということになっています。

どこという特徴があるわけではないのですが、比較的いい自然があっ

なので、実は最近ひそかに人気のある観光地でもあります。宿泊施設は村がいろいろ整備しておりますが、大体年間の観光客数が20万人台前半ぐらいでこの10年ぐらい来ています。なので、これ以上ふやさなくてもいいといますか、あんまり増やし過ぎますと、観光地になって雰囲気が変わります。なので、ほどほどぐらいがいいかなと思っている。人口の割には観光客数が多いので、村を支える大きな産業の1つというふうに言ってもよいと思っています。

今一番力を入れているのは、地域エネルギーの確立です。というのは、これは日本中そうなのですが、数字だけでいうと貧乏な地域とか貧乏な県というのがあるんですね。これはあくまで数字上のことなので、本当に生活が貧乏なのかというのと全然次元が違うのです。例えば数字上は、沖縄は最貧乏となります。しかし、実際に沖縄に行ってみると、果たしてこの人たちは貧乏なのか、そういう雰囲気があります。本当に実態ではないのです。では、数字上の貧乏というのがなぜ発生するかというと、これは私たちの家計と一緒にして、収入よりも支出が多いと貧乏になるというわかりやすい話です。

地域社会も同じです。地域社会を1つの国として見た場合、その国が幾ら輸出して、幾ら輸入しているか。輸入のほうが多ければ貧乏だしと、輸出のほうが多ければ金持ちだ、単純に言えばそういうことです。そうすると、例えば貧乏県で、高知県はいつも下から3番目ぐらいに入る。ですが、高知も海があって、畑があって、山があって、生活としては全然貧乏そうではないのですが、数字上は貧乏になる。ところが高知の場合、一次産業は大幅な黒字なんです。いい海がありますし、それから農業基盤もあります。二次産業は若干赤字ですが、大した金額ではない。三次産業、この計算は高知県の人が外へ行って使っているお金と外の人が観光なんかで高知に来て落としてお金の差額ということです。それでいうと高知県は大幅な黒字なんです。そうすると一次産業は大幅に黒字で二次産業は若干赤字で、三次産業がまた大幅な黒字と。これで貧乏になるわけではないではないかということになります。では、なぜ貧乏かといいますと、エネルギーが全部購入になっているということなのです。つまり、高知の人たちはせっせと稼いではエネルギー代へ費やして、それでなおかつ足りないから貧乏になっているということです。

実は今、日本中がそういう状況になっている。例えば岩手県というのは結構米どころで、お米の生産量多いのですが、岩手の人たちは年間かけて米をつくった

代金で、冬の灯油を買っているだけなのです。岩手県民の冬の灯油購入金額と米の出荷金額が同じなのです。もちろん一軒一軒の農家になれば、収支はもうちょっといろいろあるでしょう。けれども、県全体として見ると、これは灯油のために米をつくっているだけという数字になってしまう。これはもっと狭い地域でいっても同じです。上野村でいえば、電気は東京電力から買っています。それから当然、上野村産の灯油なんかはありません。車がなければ田舎の暮らしというのは難しいですから、ガソリンはどんどん買わなきゃいけない。つまり何を見てもみんな外からエネルギーを買っている。それが地域社会の収支を悪くさせている。ですから、何とか地域エネルギーで暮らせるように持っていこうということです。

うちの村は地域エネルギーと山の利用と絡めております。山は手入れもしなきゃいけないですから、間伐とかはやっている。7割は天然林の村です。上野村には3,000ヘクタールを持っている村外の林業会社があります。そこが100%人工林なので、村民が持っている山としては10%ぐらいしか人工林はない。人工林の手入れのあと、天然林のほうも手入れをしていったほうがいいという感じで、できるところはしていくというやり方をとっています。山が急峻なので、切り捨て間伐のようなことはうちの村はしない。切ったら全部引っぱり出すというやり方をとっているのです。その木が森林組合に集まって来ます。その森林組合が製材をして柱・板・床材なんかをつくったり、複雑な加工もします。広葉樹のちょっといい木が出てきたときには、うちの村は木工産業が結構盛んで、小さなおわんから大きな家具まで全部つくります。職人さんたちが30人ぐらい村内にいます。家具が得意な人とか、あと漆塗りが得意な人とか、人によって特徴がいろいろあります。そういう人たちが使う木が出てきたら、それ用の製材をしてそっちに材料を回しています。

ただ、実際には森の手入れをすることを目的とした伐採ですから、出してきた木のうち60%は材としては使えない。その60%の木は、ナラ系の木があった場合にはそれをおがくず化して、それでキノコの菌床に変えていくというやり方をとっています。ほかのいろんな木は、村の中に木質系ペレットの製造工場でペレットにします。この季節になりますと、それが暖房用に使われたり、温泉を加熱する燃料になります。あと、農業用のハウスの燃料にも使います。使ったペレットのうちの60%は再び発電に使っております。この発電だけでは村の電気を全部賄うことはできないのですが、とにかくそうやって徐々にエネルギー自給率を上げ

ていくことをしています。

あと、村の中に流れている川があります。そこにも悪いもなく、日本中に砂防堰堤とか砂防ダムというものがあります。あれは上から水が落下しているので、その水を受ける形で小型の水力発電をと思っています。ですが、なかなか国土交通省がうんと言ってくれない。河川管理権は国交省側にあるもので、「自分たちでタービンをつけるから」と言っているのですが、砂防ダムは砂防のためのものであって発電用ではないとか言っております。ただ最近、少し相談に乗っていいですよという雰囲気になってきた。もし、それができれば電気を100%自給できる。

今、村の中に車用の急速充電機を3カ所ぐらい設置しているのかな。ただ、残念ながら充電して走る車がない。しょうがないから役場が1台、軽自動車の電気自動車を買ったのです。もう少しバッテリー技術がよくなって、そこに暮らしている我々としては軽トラを電気自動車化してほしい。これだったら、走行距離何百キロも走らなくてもいいわけです。そういうことがだんだん進んで、そして発電容量もふやせれば、ガソリンの消費量も落としていける。そんな地域の中で循環できる体系をつくっていくという、そんな感じでやっている村でもあります。

僕の専門は哲学です。一般的には、哲学というと何か古臭いことをやっているんだなという印象です。確かに僕らはふだんでもアリストテレスなどを読んでいるときもあるし、それから仏教系の本を読んでいたります。そうすると2000年ぐらい前のものを普通に読んでいくということになりますので、その点では古臭いのですけれども。

ただ、アリストテレスにしても、例えばお釈迦さんが仏教の本を書いたわけではないので、お釈迦さんが死んでから300年ぐらいたって、初めて本ができてくるのですけれども。そういうものを書いた人たちでも共通して言えることは、その時代に何を考えたらいいか、何を考えなければいけないのか、また、どういふふうに生きていいのかとか、どういう行動とったらいいのかとか、それが哲学です。だから、2000年前のものも参考にはするけれども、やっぱり現在の状況の中で、私たちは何を考えなきゃいけないのかとか、どういう行動をしなきゃいけないのかとか、あるいはどういう生き方をしなきゃいけないのかとか、それを考えるのが哲学です。その点では非常に現代的なものが僕の専門でもあります。

当然僕は、日本の社会に生まれた人間です。そうしますと、何でも当たり前のことだらけ。だけど、外国か

ら見たらそれは当たり前なのかということになれば、いろんなことが出てくると思います。ですから、あるとき、日本と比較する場所が欲しいなという気がしました。ただ、比較する場所っているんな場所の選定の仕方があるって、例えば途上国の農村を比較地にするというやり方もあります。僕の場合には比較的日本と似たような条件を持っている社会で比較すると、簡単に言えば先進国で比較すると思っているうちに、結局フランスを比較地にすることになった。フランスは長期で行っていたことはありません。時々のごきに行っているという感じぐらいですが、回数にしたら20~30回は行っているのではないかと思います。

フランスに行きましても、もともと、上野村に行ったのも魚釣りですから、何か魚を釣りたいときがあったりします。結果として、フランスの山村とかで随分魚を釣りに行って、結果的には、結構そういう社会に詳しくなったといいますか、別に調査に行ったわけでもないのですが。あるときフランスの地方の新聞といっても、結構大きいエリアの新聞なので、この辺だったら中国地方全体の新聞ぐらいの新聞にでかか載っております。日本の哲学者がフランスの山村の調査に来ているという、そういうニュースが出ておりました。私は魚釣りに行っただけなのですが。ただ、そんなことをしておりますと、向こうの様子もわかってくる。

フランスには、とてもいい田舎がいっぱいあるのですが、今フランスの農山村地域というのは、住んでいる人たちの大体3分の2ぐらいがこの20年以内ぐらいに都市から引っ越してきた人たち、日本的に言えばIターンの人たちなのです。若い人も来ていますが、定年を機会にして来ている人とか、ですから少ない地域でも、5割ぐらいは元都市住民という感じです。多いところだと8割ぐらいが都市住民という感じです。

実はこの動きが出てきたのは、1975年ぐらいからなのです。80年代ぐらいになると、普通の動きになっちゃった。そういう動きが起き始めた70年代は、ちょっと変わった人が田舎に来るという感じだったのですが、80年代になるとごく普通の動きという感じになって、急速に人が来ました。なので、あっという間に3分の2は都市の人みたいなことになった。

僕が言うのも変ですが、向こうで、そういう人たちに「何でこんなところに来たのか」と、そういう質問をとりあえずしてみる。そうすると皆さんが言うのは「人間的な生き方を求めて来たんだ」という、大体みんなそんな答えです。「人間的な生き方って一体何なの」と質問すると、大体2つのことをおっしゃるんで

す。1つはやっぱりそういうところに来る人ですから、「自然があって自然とのつき合いができて、それができて初めて人間的な生き方ができるんだ」と。自然があるからという、それが1つの理由です。

もう1つの理由というのは、「かけがえのない人間になれる」と、よく皆さん言うのです。例えば私10年前までパリにいたんですが、「パリにいて私は価値がない」と言うのです。つまり、交換可能な人間でしかない。家族の中では交換するわけにいきませんから、かけがえのない人間だったり、友人の中ではかけがえのない人間なのですが。例えば、私はこういう会社に勤めていたと、私がかりに勤務中にばかっとなんでしまったということが起きて、会社は何も困らない。1日か2日は引き継ぎで混乱するかもしれませんが、1週間もすれば、何の問題もなかったかのごとく会社は存続するというわけです。これは人間的だと思うかという、つまり自分に価値がないという。あるいはパリの町を歩いていて、急に心筋梗塞でも起こしてばたっとなんでしまった。そうしたら、パリ市としてはこんなところで死にやがって、処理が面倒くさいというぐらいの価値しかない。つまり、その人が死んだからといって、パリが没落するわけでもない。つまり、実は社会の中においても企業の中においても、実は全く無価値な人間として生き続けたと。それは交換可能な人間であって、かわりが一人入れれば数字は同じというような、そういう世界だと。でも、そういう生き方がもう嫌になったと、それで田舎に来ると違う生き方があると。

実はフランスという国は、人口がたしか6,000万人台ぐらいだと思いますから、日本の大ざっぱに半分ぐらいというふうに思ってもらえればいいですが、そこに3万6,500幾つかの市町村があるんですね。ですから、日本の人口ですと、7万ぐらい市町村があるというふうに考えてもいいわけです。そうするとその中にはパリ市とか、マルセイユ市とか、これが大阪、東京みたいなものですから、巨大な都市もあります。ところが田舎のほうに行きますと、大体人口100人から200人ぐらいの村が多くて、村によっては何十人ぐらいしかないというところもあつたりします。そういうところは泊まる場所がなかったりもするので、近くの比較的大きな村にホテルがあって、そこに泊まるということがあります。巨大村と言われているような村でも500人とか、よっぽど多くて1,000人とか、それぐらいが非常に大きな村。

だから、向こうの人たちと話をしていると説明が難しい。「日本は今どうなっているの」と聞かれて、「い

や、ちょっと過疎化で困っているんだと。うちの村は今1,200人しかいない」と言うと、「そんなにいて何が問題なのか」という話になって、ちょっと空間が違うというのを説明するのが面倒くさい、日本でいうと、田舎に行くと集落ごとに村があるというふうに思ってもらっていいぐらいあります。そこにはちゃんと役所があって、必ず小学校があって、郵便局があって、今は使われていない教会があるという感じかな。

実はフランスはカトリックですが、今、クリスチャンとして教会に行く人たちは大体人口の5~6%ぐらいで、圧倒的に無信教です。だから、今の日本のほうがむしろ仏教的だと言いたくなるぐらいです。というのは日本の場合、自覚している仏教徒というのはそんなにいませんけれども、何となく生活の中にまだ仏教的なものが残っているといいますか。だから結婚式なんかでも、向こうの結婚式は寂しい結婚式で、大体式を挙げずに、役所に婚姻届を出しに行く。すると役所の職員さんがカウンター越しに、「ここで宣誓しますか」なんて話になって、「やります」と言うと、「では、宣誓してください」なんて感じで宣誓をして、指輪の交換もして、それでおしまいという、そんな感じですよ。友達を呼んで、お祝いのパーティーをしたりしますが、教会に行つて結婚式を挙げている人はいますが、圧倒的に少ないのです。日本のほうがよっぽどたくさんの方が教会で結婚式を挙げているのではないかという気がするぐらいです。それぐらいもうキリスト教の社会とも言いがたいような、特に田舎のほうのそういう雰囲気強い。教会はあるけれども、祭壇もちゃんとあるけれども、利用のされ方としては地域コミュニティーセンター的な感じだったりします。そういうのが多かったりします。ただ、建物としては必ずそういうものがあります。

そういう小さい市町村がたくさんある一方で、地方分権の考え方は日本よりも広がっておりますので、市町村が持っている権限はかなりあります。そうすると、この人口の村で自治ができるのですかと、そういう話になるのです。住民がNPO組織をつくって、全部引き受けていると考えればよいといえますか、部門ごとにNPO組織があります。だから人口が100人ぐらいの村なのに、NPOが15あつたりします。それが地域設定NPOもありますし、それから道路管理NPOとか、グラウンドとか何か持っていればその管理NPOとか、いろんなものがあります。学校の運営も教育委員会はありませんで、小学校は市町村の直接管理下にあるけれども、中学になると県の管理下とかになってきます。小学校の場合、学校の管理運営をやるNPOがあつて、それが教

育委員会とPTAが合体しているような雰囲気なのです。それが学校の先生と話し合いをして、学校の管理運営をしていくという、そんな感じです。

そこに各NPOに本当に必要な経費だけ補助金が出ているという感じです。だから、60代の人たちがすごく忙しいですね。というのは、30代などは、幾らやりたくても、昼間は自分の仕事があってNPOばかりやられていけないという感じになりますから。60代になると、年金生活者が出てくるので、年金生活をしながらNPO専門みたいな感じで、一人で5つぐらいNPOを掛け持ちというのがいたりして、そうやって地域社会をつくっていく。

それはかなり大変なのですが、結果としては、ここは自分たちがつくっている地域だという雰囲気を高めていて、またその人たちがその仕事をしていてくれるから地域がもっているという、お互いにそういうことがよく見えています。だから、こういう社会では交換可能な無価値な人間ではなくて、誰もがかけがえのない価値のある人間として、社会の中で価値のある人間として生きていける。それがいいから来ましたという人が大変多いといいますか、もちろんそんなことやりたくないという人だっているでしょうけれども、そういう人たちは田舎に来ないわけです。来る人たちはむしろそこに魅力を感じて来ているというのが、今のフランスの様子です。

この「かけがえのない」という言葉ですけれども、かけがえのなさって、どこから発生してくるのかというと、これは当然ながら関係の中で発生する。自分一人で「俺はかけがえのない人間だ」と幾ら居直っていてもそんなものだめなわけです。例えば、やっぱり家族の中ではかけがえのない人間、家族の関係の中ではやっぱり大事な子供だったり、大事なお父さんだったり、大事なお母さんだったりするという、だから関係がかけがえのなさをつくっている。そうするとしっかりした関係の世界こそがまさに生きる場所であって、都市の社会になってくると、関係がはっきりしない。家族とか友人の中では関係はあるけれども、企業の中でもいっとき関係はできますが、それがさっき言ったように、いきなりなくなってしまうたりしても、何ら問題がないという、ということは結局ちゃんとした関係ではなかったということになってしまうわけです。そういう関係の薄さ、あるいは関係のなさといいますか、それが都市社会をつくっている。田舎に行けば、自然との関係も含めてですけれども、いや応なく濃密な関係がそこにあって、それが個人の尊厳をつくっている。そういうことだと思えばよいということです。

今、私たち哲学系の人間たちというのは、近代社会というのをどういうふうに捉え直すのかということに、相当、皆さん、頭を使っています。例えば10年ぐらい前に亡くなった方で、フランスのレヴィ・ストロースという、有名な文化人類学者でもあるし、哲学者といってもいいような仕事していましたが、そういう方がいらっしゃる。レヴィ・ストロースの本を読んでいると、この人は現代人には受けるなという気がする。それは皮肉で言っているのではなくて、実はレヴィ・ストロースはフランス国籍の人ですが、ユダヤ人なんです。90幾つまで生きて、この間、亡くなっていますから、戦前に学校を終えてということになります。非常に優秀な学生さんであっても、戦前のフランスでは、ユダヤ人ですから。フランスは結構階級社会ですから、いいコースに乗れるかどうかみたいなのがあったりするのですが、やっぱりいいコースには乗れないといえますか。だから、フランス人だけでも、やっぱり一級のフランス人ではなくて、二級のフランス人扱いみたいな感じがあります。ところが、ユダヤ人というのはユダヤ教でつながっている世界ですから、そのユダヤ教でつながっているユダヤ人世界からは出てしまっている。ですから、彼はユダヤ人のコミュニティのメンバーではないのです。そうすると、ユダヤ人世界にも居場所がないし、それからフランスの中にも居場所があるような、ないようなという、そういう感じです。そうこうしているうちに、結局いい仕事につけなかったので、ブラジルのサンパウロ大学から誘いがあったので、そこに赴任して、そこでアマゾンの先住民の調査研究をする。そうこうしているうちに、今度はフランスがドイツに占領されますので、もうフランスに帰ることは不可能になってしまって、それでアメリカに居を移して、今度はアメリカの先住民の研究をやっていた。戦後長らく時間がたって、フランスに帰ってくる。



それで、晩年はもう、世界のレヴィ・ストロースですから、フランスでもそういう分野のトップの地位にいてという人なのですが、何となく居場所がないんですね。だから、ちゃんとフランスで飯も食えるし、ちゃんとした待遇も、少なくとも晩年は受けているし、世界的な評価も高いし、そういう意味では居場所がないわけではないのではないかという感じですが、どことなく自分の本物の居場所を持たないという、そういう感じが彼の文章にはいつも流れていて、これは現代人の感覚に近いなというか。

私たちみんなそうですけれども、ちゃんと居場所があるんですよ。どこかで仕事をしていて、多くの方は家族を持っていたりもするし、知り合いも友人もいるし。だから、決して居場所がないわけではないといえますか。だけど、本物の居場所という感じでもないという、何か仮の場所にいつもいるみたいな感じがある。そのあたりが、かつての農山村地域なんかで暮らした人たちとの違いで、やっぱり農山村地域で暮らしたような人たちというのは、そこにやっぱり根っこを張っていますから、うちの村が僕の居場所だみたいなことを言うことができた。それが都市の住民になってくると、家もある、仕事もある、家族もいるとなっても、何かちょっとすき間風が吹いていると。その感覚みたいなものの持ち主としてレヴィ・ストロースはいるといえますか。だから、そういう意味で、現代人の感覚を代表している一人という、そんな気がしたりします。

ただ、レヴィ・ストロースなんかも、どんな言い方をしているかという、例えばフランス革命という、1789年ですが、「自由、平等、友愛」というスローガンを出した革命ですが、フランス革命は、そのときに出した理念も含めて、世界に対して非常に大きな影響を与え、そのことによってフランスという社会が世界で特別な社会であるような、そういうものを獲得した。だけど、後世の歴史家たちは多分そういう評価をしなくなる。フランス革命こそが失敗の始まりだったと。あのことによって人間たちは居場所を失って、その後の経済発展なんか振り回されていく、この時代をつくったと。だから、フランス革命は、ある意味では偉大な革命だったかもしれないけれども、その偉大さは逆の偉大さといえますか、世界をぶち壊してしまった偉大さといえますか、そういうものを後世の歴史家たちは記述していくことになるだろう。そんな言い方をしている、つまりフランス革命・近代の理念とか、そういう式なものに対して、全面的な批判を加えているといえますか。

実は、今、私たち哲学とかそういうことをやっている人間はこういう問題に直面している。つまり、近代というものは間違いなく生産力も高めたし、それから移動の自由も高まったしと、いろいろあるけれども、結局、気がついてみれば、そのことによって、私たちは居場所も失っていったし、社会の根っこがなくなっていったといえますか、そういうことです。

だから、今日も朝、テレビをつけたら、ゆうべ、僕、鳥取に泊まっていたんですけど、実は昨日、ちょっと姫路で用事があったので姫路にいました。夜遅く、11時ごろ鳥取のホテルへ来まして、朝、テレビをつけたら、大阪で万博が決まったとあって騒いでいましたが、万博を今ごろやって何かいいことがあるんですかという感じですが、また町をぶち壊して、東京オリンピックもそうですが、何か物すごく時代錯誤なことをしているという感じがむしろ強い。

僕は、名古屋万博があったときに、その筋からちょっと委員になってくれと言われたことがあるんですけど、嫌と言いました。僕は今ごろ万博をやること自体に反対です。途上国かどこかで、それをきっかけにちょっとインフラを整備しようとか、そういうところがやるのだったら、それも1つの考え方ということですが、日本でやる意義なんかどこにあるんですか。一瞬のためにお金を使って何か意味があるかと、そう思っているのです。また大阪で騒いでいるニュースが出ていて、政治家としては、万博を持ってきましたとか、これで地域が発展しますとか、いろいろ言えるのでしょうけれども、何かそれよりももっと土台になるものをもう一度考えなければいけない時代に来ているのだろうなど。

つまり、万博をやる、オリンピックをやる、そういうものに巻き込まれていく精神世界、そういうものをつくってこそ近代でもあって、まさにそういうことに対する総括が進んでいく。レヴィ・ストロースの言うように、フランス革命は敗北の始まりだったというようなことが、もしかするとあるのかもしれないということです。そういう中で今、いろんな近代の幻想とも言うべきものを取り払っていかないといけない時期に、私たちは来ている。例えば、経済発展すれば幸せになれるというのも違うでしょという、やっぱり幻想を取り払わなきゃいけないと。もちろんこれは、経済発展するなど言っているわけではないのです。

例えば江戸時代というのは、初期と晩年を見れば、相当経済発展しているんですね。だから、別に経済発展してもいいわけです。ただ、江戸時代の人たちは、経済発展なんか目標にしていなかったということ

なのです。それぞれの人たちが、自分たちの村をもっとよくしようとか、それから、あのころは職人さんたちが多く時代ですから、農民も含めて、自分のわざをもっときわめて、もっといい仕事ができるようになるうとか、そうやってみんなが暮らしていた。それは、結果として、経済も相当発展させたけれども、経済発展を目指して人々が動いた時代では全くない。だから、結果として、気がついたら経済発展していたというのは、何ら否定する必要は全くないのです。何か GDP をふやせばよいという、そういう 1 つの幻想ももう取り払っていかなければいけない。

最近いろんな研究が出てきて、へえと思っています。幕末のときにペリーが黒船で乗ってやってきて、日本中びっくりしてしまって、大騒ぎになった。あのときのアメリカの GDP と日本の GDP はどのぐらい差があったのかというのが、最近、かなり計算する人たちが出てきています。コンピューターを駆使するといろんな複雑な計算ができるので、いろんな指数から計算すると。そうしましたら、同じなのです。考えたらそうで、ペリーが来たときは、これからアメリカは南北戦争をやる時代なんですね。ですから、まだ西部開拓時代のアメリカなのです。東部のほうでは若干工業が生まれてきているとしても、まだまだ腰にぶら下げてやっているような時代なわけです。アメリカは今でも腰にぶら下げているピストル社会ですが、ですから、実はそんなに生産力はないんですね。だから、日本はあのとき、何ら慌てる必要はなくて、来れるものなら来てみるというだけでよかった。そうすると、黒船は来ても、兵隊をたくさん連れてやってきて占領しちゃうなんていう力はアメリカには全くなかったわけです。

イギリスなんかはかなり勢力がありましたけれども、実はヨーロッパの国々もほとんどは日本と似たり寄ったりで、とりわけ日本が当時後進国でというような話では全くなかった。ただ、欧米は、軍事力は持っていた。それに対して日本は、江戸時代 250 年間、戦争をしないでやってきました。だから、平和産業の生産力だったんです。簡単に言えば、かんざしをつくる力なわけです。ですから、それで軍艦をつくった国と戦うというのは大変だった。ですが、全体の生産力としては別に日米に差はなかった。

それが、殖産興業とか富国強兵という、明治になると近代産業の導入というのを始めた。そういうふうに学校で教わっていますが、昭和 16 年に日米戦争が始まったときに、アメリカと日本の GDP は、大方 10 対 1 なんですね。ということになると、明治の殖産興業、これは大失敗だったのではないかとということになる。別

に GDP をふやせばいいといっているわけではないけれども、わずかに数十年の間に 10 対 1 まで開いた。この状況で戦争を始めるという神経も驚いちゃいますが、なぜこんな大失敗をやったのか。もう理由ははっきりしていて、一番大きな理由は、江戸期までの生産力をうまく使って新しいものも導入するというのを全くしてなくて、古いものを全部壊して新しいものを入れようとしたからです。そのために、本当の生産力にならなかったということです。

この辺でいえば、出雲のたたら鉄が江戸期までの鉄の中心でした。ただ、これは結局刃物用の鉄ですから、大砲をつくったりするには不向きだった。それでいい大砲がつかれなかった。ところが、日清戦争のときには出雲の職人たちが改良して、大砲用の鉄が出来るようになっていた。その鉄の力で日清戦争をやったというふうに言ってもいいと思います。八幡製鉄の鉄が間に合うのは日露戦争からなので、明治 20 年だか 21 年に八幡は火入れをしていますから、実際に稼働するのはまだ 10 年ぐらいかかた。つまり、在来の技術と全く関係ないものをぼんと入れちゃっているから、動かせる人がいないわけです。幾らお抱え技師を連れてきても、やっぱり現場で動かせる人がいない。だから、動かしてはトラブルを起こすというのを繰り返して、まともに生産できないという状況が 10 年ぐらい続いたわけです。その間にむしろ出雲の職人たちが工夫をして、鉄の改良に取りかかった。だったら、その技術をうまく生かしながらいけばいいのに、八幡が稼働してくると、出雲の鉄のほうをむしろ潰しにかかる。それで、たたら鉄を一掃しちゃうわけです。全ての分野でそういうことを起こして、だから、伝統的な力を全部破壊しながら欧米のものだけを入れてくるというこのやり方が、GDP の向上にさえつながらなかったということです。

また、そのやり方をとったから、新しいものを入れるところに財閥ができて、その財閥が政治的な権力と結託するという、非常にいびつなことをやってしまった。つまり、庶民の力の基礎の上に新しいものも入れるということになると、多分、財閥形成にはならないです。ですから、こういうようなことで、昭和 16 年になると、圧倒的な差がついていたということなのです。そうすると僕らも明治維新からの「殖産興業」というのも、ちょっと言葉から見直したほうがいいのかという感じになって。「伝統廃棄と欧米技術の導入」とか、例えばそういうふうにも書きかえないといけないのではないかという気がしてくる。つまり、私たちはいろんなところで近代幻想にのみ込まれている。これから

は、そういうことの検討を1つずつやっつけていかなければいけないときに来ているという感じです。

人間は個人になれば自由になれるというのも1つの近代幻想です。実は、自由な個人というのは、すぐれた関係が作り出すものなのです。家族の中でも、例えば家父長的なおやじって、最近は余りいないでしょうけれども、全員動けと言うおやじが仮にいたとすると、結局それは、そういう関係ができてしまえば、実は家族たちは不自由を感じるし、あるいは、そこで威張っているおやじもどこか不自由なものを持つことになるでしょう。だから、その関係が不自由な個人をつくっているということです。逆に言えば、もっとちゃんとした関係でつき合っていれば、それぞれがもっと自由な家族の一員になれるというふうに言ってもよいし、だから、どのような関係をつくるのが自由な人間をつくっていくのか、そういうようなことを今考えないと、何か個人にしたら自由だという話とは全然違う。むしろ個人だけにしちゃうと、ばらばらな人間になって、そこに今の都市の問題がいっぱいある。

実際、東京なんかですと、東京は人口が多いですから、亡くなる人の数も多いのです。今、東京で亡くなっている人ですと、大体10人に1人は、いかなる意味でもお葬式は挙がっておりません。お葬式って、大規模にやりたい人はやればいけれども、小規模でもいいわけで、本当に仲のいい数人ぐらいで、それでしみじみと送るという葬式もなかなかいい葬式ですから、やり方はいろいろある。だけど、いかなる意味でも、葬式は挙がっていない。つまり、火葬して終わりにしただけということです。亡くなると誰も遺体の引き取り手がないというのも結構ある。その場合、お子さんはいないのかというところでもなくて、お子さんはいるのですけれども、もう家族の関係が壊れているので、お子さんは引き取り拒否みたいになっている。実は、日本の法律では、亡くなった場合に一番近い血縁の人が引き取らねばいけないという決まりがあるんですね。ですから、警察が説得したりして、あなたは引き取らないわけにいかないんですと。そうすると、では、もう金を出すから、葬儀社を通して火葬してくれと、そういう感じで終わりという、そういうことがあったりします。やっぱり人が亡くなったときに、誰一人、手を合わせる人がいないという、そういう関係が生まれていて、日本全体だと今5%ぐらいですが、東京とか大阪ですと10%です。そうすると、これが自由な人間と言えるかということになるわけです。つまり今、そういう問題点に、私たちは直面しなければいけなくなってきた。

それからもう1つは、人間は、ばらばらになればなるほど、システムに従属せざるを得ないという問題がある。やっぱり生きていかなきゃいけないですから、そうすると、システム従属型の生き方になっていく。気がついてみると、今の人間たちは、既存のシステムの中でポジションをとることが人生になっている。つまり、子供のときは、少しでもましな高校に行くための、その高校生というポジションをとるために中学では一生懸命勉強したりしている。それに成功したら、今度は某大学の大学生になるというポジションをとるためにまた頑張る。もし仮に、また成功ということになると、今度は某企業か某役所かわかりませんが、またそのシステムの中にポジションをとる。結局それをずっとやっているうちに人生が終わる。最後は安定した老後というポジションどりになっていて、そこでまた準備をしなければいけない。

そうすると、何かをつくっていくとか、何かをやっていくというところがどこにもなくて、システムの中にポジションをとっているだけ。こういう生き方が、気がついてみれば、近代人の生き方になってきた。もちろんそのポジションをとって何かをやろうという気持ちはあったりはするけれども、結局それはほとんどできない。むしろ何とかあそこにポジションをとりたい、そっちのほうを中心になった生き方。世界中がそうなっていくと、冒頭にフランスの話でお話したように、そのポジションから自分が抜け落ちて、誰か別の人がそのポジションに座って、システムは安泰。自分は大した価値はなかったという時代ができてしまったということです。

ですから、個人の社会はシステムの強化を生み、そして、人間の生き方は、そのシステムの中でポジションをとることを目指すというような、そこだけではありませんが、そういう側面がだんだんだんだん強くなるわけです。これも、果たしてこれでよかったのかなという、やっぱり問いかけをせざるを得ない時期に来ているという気がしています。

実は、僕ら哲学をやっている人間って、昔は僕も基本的には西洋哲学ですから、例えばカントとかヘーゲルとか、そういう話になると比較的話がしやすい。日本の哲学をやっている人はみんなそうなんです。ところが、実は最近は何となく変わってございまして、西洋哲学のほうは西洋哲学の限界を意識していて、むしろ東洋思想から学ぼうという雰囲気が強い。

実は、先ほどお話ししたレヴィ・ストロースですが、晩年に、『遠近の回想』というタイトルになっていたかと思いますが、インタビュー集の本が1冊あります。

それは若手で非常に優秀な人がインタビュアーになって、レヴィ・ストロースの一生の仕事みたいなものを上手に聞いていて、総集編みたいな本をうまくつくっている。それを読んでいて、なるほど、こういう時代かと思ったのは、そのインタビュアーの人が、「ところで、レヴィ・ストロースさん、ちょっと聞きたいんですけども、あなた、昔書いた論文の中で、『遠い眼差し』というタイトルの論文がありましたよね。論文タイトルとしてはちょっと変わったタイトルなので、ふっと記憶しているのですが、あのタイトルつけるに当たって何か参考になったものがあったんですか」と質問するんです。するとレヴィ・ストロースが、「ああ、あれですかと、あれは世阿弥ですよ」と答えて、そしたらインタビュアーの人が、「あっ、やっぱりそうですかと、そうではないかと思っていたんですけども、一応確認したくて」。それで、その話は終わりなんですね。

これ、フランスの思想界だったら通用するんですね。逆に、日本で今、この会場の中で、「ああ、それは世阿弥ですよ」で、びんときた人がどのぐらいいるかという話になると、相当少ないのではないかという気がします。つまり、世阿弥なんかについても、人文系の分野の方だったら、フランスだったらほぼ全員読んでいるというふうに言ってもよくて、今そういう時代なのです。

ちなみに、今言った「遠い眼差し」というのは、世阿弥の『風姿花伝』というのは演劇書ですが、こういうことをしてはいけない、こういうふうにしなきゃいけないみたいな演劇の話が書いてある。その中で、当然、世阿弥ですから能の話ですけれども、仮に今、僕が立っているところが能舞台として、皆さんが観客と、僕が能の役者として、そうすると、僕は視線としては皆さんを、にらみつけはしないにしても、こう見ているような格好で舞うわけですね。この視線では能にはならないと世阿弥が言っている部分で、能というのは観客と一体となって神仏の世界をのぞき見するというか、行くというか、もともと神事で行われるものですから、観客との一体性が必要なんですね。それを目でこう見ちゃうということは、私、役者、皆さん、観客という、そこに分断ができちゃって、これではいかんと。ですから、役者は視線を別のところに持ってこなければいけないと。でも、一般的な解釈としては後ろです。後ろに視線を置いて、自分を見ながら観客を一体に見るという、その視線を確立できないと能にはならないという、世阿弥の演劇書の確信部分なのです。言葉としては「離見の見」という、離れて見るの「見る」で「離見の見」という言葉が使われるのですが、その「離見の見」を「遠い眼差し」という訳にして、レヴィ・ストロース

が使ったということです。さっき言ったように、今の私たちには、いきなり、「ああ世阿弥ですよ」で終わられても困るんですね。逆に日本人がそうなっている。

あるいは、僕のところにいた大学院の学生さんが、ある夏、何をしに行ったのかわからないけれども、ケニアに行ったらしくて、ナイロビ大学の大学院の学生さんと話をしていた。そしたら、ナイロビ大学の学生さんから、「谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』って、すごい本ですよ」と言われて、本人は、「済みません、読んでおりませんので」と答えたようです。『陰翳礼讃』もヨーロッパでは普通に読まれている、人文系の人とか、あとあれは芸術系の人もよく読んでいます。光と影という話から日本文化論を書いているものです。何とケニアに行って、学生さんからそれを聞いたという。今、本当にそういう時代です。ですから、僕らも知らないうちに、だんだんだんだん東洋思想のほうに深入りしていく、そんな感じです。

東洋思想といってもいろいろあります。今、私たちが東洋思想圏というか、東洋思想と呼んでいるのは、儒教思想を外した東洋思想です。儒教思想ってやっぱり合理主義の思想なので、合理という言葉は実は儒教用語なんですね。ですから、むしろ西洋思想に近いといえますか、全てを合理的に捉えていこうとするという。もちろん、その合理の中身は、儒教の場合には、今の人間から見るとこれは本当の合理的なのかということはあるでしょうけれども、全てを理屈で捉えようとしたということには変わらない。だから、その点では西洋思想に近い。

それに対して東洋思想というのは、表面的なことは理屈で説明することもできるけれども、核心の部分は結局説明することは不可能だという立場をとる。そういう思想を東洋思想と呼んでいる。僕らは東洋思想圏という、日本から出発すると、日本列島から南下して行って、台湾に抜けて、フィリピンあたりに行って、それで東南アジアのほうに抜けて、それからチベット、モンゴルのほうに来るこの巨大三日月圏、それを東洋思想圏と呼んでいます。中国思想の中にも道教とか、ちょっと近いのはありますけれども、道教も幅があるので、儒教に近い道教もあるし、いろいろある。ただ、はっきりしていることは、儒教はちょっと東洋思想とは違うんだよねということなのです。

そういう世界の中に共通する考え方があって、それは「真理は捉えられない」という言い方がいいですか。実際、例えば「人間とは何か」という質問をした場合に、核心の部分って説明できないですよ。幾つかの脇役の部分には言える。例えば「こういうことをしちゃいけ

ないよ」とか、「こういう生き方をしなきゃいけないよ」と言うことはできるけれども、「人間の本体って一体何なのか」という質問をされると、そんなものは答えようがありませんということです。

あるいは、哲学とか思想において一番大事なもののというのは幸せということで、「もし世界中の人たちが極めて幸せに暮らしているとすれば、もう哲学なんか役割はありません」というふうに言ってもいい。「幸せとは何か」って、みんなわかるんですね。わかるんだけど、幸せを説明してくださいとって、ちゃんと説明できる人がいるかという、実ははない。あのとき感じた私の幸せ、そういう現象を説明することは、場合によったら可能かもしれません。だけど、現象というのは、そのときは幸せに感じたけれども、後になってみたら、あれが失敗の始まりだったという可能性だってあるわけです。

例えば、受験勉強を一生懸命やって希望の大学に入ったとき、その時にはもう幸せの絶頂なのだけでも、20年たってみたら、あんな青春時代を過ごしてしまったのが私の失敗の始まりという、不幸の始まりであったというふうな、後ではそうになってしまうということだってある。必ずそうなるというわけではないですが、あり得ない話ではない。それは結婚するときみたいなもので、結婚するときには幸せの絶頂だけでも、振り返ったら不幸の始まりだったということだって、100人に1人ぐらいはいるかもしれません。

実は、現象というのは価値評価が変わってしまう可能性がある。では、その中で、幸せとは本当は何を指すのかと言われたら、もう答えようがない。僕は魚釣りが好きな人間ですから、川に行ってお魚を伸ばしていると結構幸せなんですけど、それをみんなにやらせたら、みんな幸せになれるかといったら全く違います。ですから、実は一番大事な問題というのはいつも説明ができないといえますか、そこにこそ核心があるという。そういうことを見てきたのが東洋思想です。だから、合理的説明なんて不可能だという立場をとった。

その局地みたいなところに仏教思想があって、ですから今は、哲学をやっている人間も結構仏教を勉強している時代なんです。仏教というのも、実は何をもちょうて仏教というかといったら難しく、なぜかという、普通に考えれば、釈迦が悟りを開いて仏教が始まったというわけになります。それは、紀元前300年ぐらい昔かな、400年ぐらい前か、釈迦が悟りを開いた。それは、いろんな記録がありますから事実でしょうということになるわけです。ところが、釈迦は一行の文章も残してないんですね。それから、釈迦から直接教わっ

たような弟子たちも一行の文章も残してないです。

というのは、当時のインドには、文章で何かを残すという習慣はなかった。では、どうやって残したかという、みんなよく記憶して忘れないようにしようというやり方なんです。ですから、文章で残さない時代だと、きちっと記憶で残すというのは、比較的、今の人間よりはできるだろうという気がします。それにしても、最初の仏教書のようなものが、釈迦はこう語ったんだよという話が出てくるのが、釈迦が死んでから300年ぐらいたってからなんです。その300年間にインドの社会が安定していて、あんまり変動がなかったということだと、記憶が比較的よく伝えられたという可能性はあるのですが、あの時期のインドというのはむしろ激動期なんです。いろんな変動があった時代。だから、人々の価値観も変わっていく。300年間の時代に、記憶だけで継承できたかということになります。ですから、一応一番古い文献を読んでも、本当にこれ、釈迦がこう言ったのかというのはよくわかりませんということなのです。その上に、そういうものだから、「本当は釈迦はこう言ったんだ」という修正版が繰り返して、繰り返して出てくる。

そうすると、もういろんな仏教教典ができちゃう。その中に上座部系の仏教、昔は小乗仏教という言い方をしましたが、小乗というのは乗り物が小さいという大乘仏教側が使った侮辱語なんです。大乘仏教は、「我々は大きい乗り物に乗っているぞ」と、「おめえらなんか小せえ乗り物にしか乗ってない」と、こういう言い方なので、一応正式には使わない。上座部系仏教という言い方は今は普通なんですけど、そっち系と大乘系でまた使う教典も違えば、考え方も大幅に違う。それが仏教なんですとかと言われると、はっきり言うと、よくわかりませんという感じです。

ただ、言えることは、日本に伝わってきたのは大乘仏教であり、それが非常によく日本では定着した。この際、小乗という言葉使いますが、では小乗系の仏教と大乘系の仏教は何が違っているのかという、小乗系の仏教というのは、悟りを開くためには出家してお寺に入って修行しなきゃだめということです。大乘系はそれを否定したといえますか、むしろこの社会の中で苦悩している人間たちのほうが本当のことを知っているという考え方。だから、お寺に入って修行するのもいいけれども、お寺に入って修行するのは、この世界の苦悩から逃げてしまうというですね。むしろ、ここで苦闘する、そういう人間たちこそが悟りが開けるといって、そっちの立場をとった。なので、出家を別に否定はしていませんが、出家しなければいけ

ないという発想は持たない。だから、大乘仏教は1つの大乘仏教運動として、民衆仏教運動として起こったということでもあったといえます。

もう1つ言えることは、もとの仏教は、空という考え方が軸になっている。つまり、「私というのは、実は本体は空である」ということです。だから、私の意識が捉えている私だけが私であって、その意識を外してしまった本当の私といいますか、奥にある私って、それは結局、捉えることができないという、捉えられないから空だといっているわけです。私の現象だけが捉えられるという、そういう立場です。人間の本质は空であるという立場、そういう視点から見れば、社会も1つの空。だから、社会の現象は幾らでも捉えられるけれども、社会の本当の奥にあるものは何なのかという、捉えることが不可能ということになります。

だから、小乗系の仏教は、真理は存在するという立場をとったのに対して、大乘系の仏教は真理もまた空という立場をとる。つまり、真理なんてことは人間には捉えられないという。釈迦が悟ったというのは、真理は捉えられないということを知ったんだと。真理だなんて捉えてない。だから、釈迦が一生懸命、真理を語った教典というのはあるのですが、例えば法華経なんかはその1つですが、あれなんかでもちゃんと釈迦が言っているのは、真理なんか説明できないんだと。だけど、ただそう言って突っぱねていたのでは皆さんお困りでしょうから、一生懸命、説明できるとこまでやってみますと。これはあくまで方便であって真理ではありませんよと、できるとこまで言ってみただけと。本当の真理はその先ですよ、みたいなことを言って、だけど、言えるところまで言ってみるとい人もどこかにいなければいけないからということなのです。だから、大乘系だとそういう立場になっていくのです。

華嚴経というお経があります。あれなんかも読んでいるとおもしろいなと思う。それは、華嚴経って、華嚴の仏の中心は盧舎那仏なので、大仏様です。盧舎那仏は何にも教えてくれないんですよね。だから、奈良の大仏さんをお参りに行って頼み事なんかしても絶対だめです、そんなことを聞いてくれる仏ではないわけですよね。あれは宇宙の真理をあらわしているだけなので、何も語らない、何もしてくれない、ただ、宇宙の真理を、姿をあらわせばこれですとだけ言っているだけなんです。

だから、華嚴経というのは盧舎那仏の教えを伝えているお経ですが、盧舎那仏は座っているだけで何も言わないわけですね。その真理を自覚した人が釈迦として登場する。釈迦も何も言わないんですよね。それで、釈

迦は時々みんなに教えようとして、この辺から光を出したりする、やるんですが、言葉は一切語らない。だから、釈迦が出した光みたいなものを見て、わかる人はわかるんでしょうけれども、とにかく何も教えない。釈迦が出てくるだけといいますか。盧舎那仏に至っては、光も出さない。その結果、普賢菩薩がスピーカー役を引き受けて、普賢が釈迦に成りかわって一生懸命説明をしようとする。普賢はまだ如来になっていない菩薩なので、まだ説明をしたりするようなところにいるといいますか。つまり、まだ最終的な真理に到達してないということで、そこまで説明するみたいな話になるんですね。だから、すごくおもしろいお経なんです。

では、華嚴なんかの教えなんかで、何で真理は語れないとしているのかということ、実は真理は関係だからなんです。つまり、真理は固有の実態ではなくて、全て関係の中にある。だから、盧舎那仏は、人間も含めた全宇宙的關係の、その關係のありようをあらわしているだけなんです。関係に実態はないという捉え方なわけです。



だから、家族の關係もそうで、關係は實態を持たない。だけど、その關係があることによって、いろんな現象が出てくる。その結果として、幸せな家族ができたりするわけですが、それはあくまで現象であって、その現象をつくっているのは全て關係というものであり、關係は目に見えないという。その關係を全ての人たちが持っている、だから、盧舎那仏的關係の世界をあらゆる人間たちは持っている、奥のほうで。実は宇宙ともつながりながら私たちは生きているという。だから、全世界ともつながり、全自然ともつながり、そして、全ての人間ともつながりながら実は私たちは生きていて、ただし、それは見えない世界、ただ見えない關係が展開しているだけだと。そこから発生してくる、もっと個別の關係みたいなものがあって、そういう上に現象の世界があるだけだということ。だから、物事の本質

は全て関係の中にあるという捉え方をしていったのが大乘仏教の世界なのです。

そうすると、仏教がいいか悪いかという話よりも、やっぱり考え方としてはヨーロッパの思想よりも魅力的だなということが出てくる。だから今、こちらを研究する人が多くなってきた。つまり、向こうだったら、もとは全て固有の実態だという話になっていて、だけど、仏教系の考えでいえば、もとは全て関係だという話になっていく。だから、ちょっと言いにくいんですが、例えば人権というものを大事にしましょうという話と人権という捉え方は間違いですという言い方、僕らは矛盾する2つのことを同時に言っている感じがする。つまり、あれは、人間には固有の人権という権利があるという捉え方をすると、そんなものはありませんということにもなる。そうではなくて、人権というのは、人権が守れるような関係の中にある。だから、どういう関係をつくっていったら、人間たちが侮辱されたりすることなく、ちゃんと尊厳が守っていけるのかということなのであって、初めから人間には人権という権利がありますという捉え方は間違いですというふうに僕らは思っている。だから、むしろ、それを関係論としてやり直さなきゃいけないと思うのです。

ただ、現実の問題としては、人権無視というのは明らかに発生しています。世界的に見ればもう本当にひどいものです。ですから、それに対してやっぱり人権で立ち向かわざるを得ない。現実の問題としては、そういう人権侵害のようなことが起きれば、人権を守らなければだめじゃないですかという対応をしていく。ただ、やっぱり根本的な問題としては人権ではないんですよ。人間も自然も、その価値が損傷されることのないような関係的社会をどうつくるか、そっちのほうで本当の課題なんです。ただ、現実には起きるさまざまな不正がありますので、そこでは人権で向かわざるを得ない。だから、矛盾したことを同時に一緒にやっているという感じです。

今の時代って、そういう視点がどうしても大事になります。例えば今、非正規雇用の方なんかが多くて、格差社会ができています。やっぱりこれに対しては、人を雇う以上はちゃんとした雇い方をしなさいと言わなくてはならない。鳥取大学はわかりませんが、大学も学生さんの就職問題になると、非正規雇用ではなく企業は責任持って雇ってください。大学ほど非正規雇用だらけの職場はなくて、非正規雇用の先生がたくさんいるはずですし、職員さんも相当いるはずなので、ちょっと鳥取大学の具体的数字は知りませんが、

今そういう感じです。こういうことに対しては、「余りにもひどい雇い方をしてはだめですよ」ということを、やっぱり言い続けたいといけません。

だけど、今の課題はそこまで終わりではなくて、正規雇用ならいいのかという問題が同時にある。今の企業なんかですと、正規雇用をされても、クビにしたければすぐに使い捨てでクビにしますし、ブラック企業のような企業もたくさんあるし、それでいて仕事は実につまらないし、社会をよくしているどころか悪くしているような企業がいっぱいあります。そうすると、そんなところでずっとポジション取りだけやっていて本当にいいんですかという、そっちの問いもやっぱりやっていかなければいけない。明らかにこれだけ非正規雇用を増やしているのは社会的不正というふうにもいいです。ですから、それに対しては「ちゃんと雇いましょうね」ということを言い続けなければいけない。だけど片方では「ちゃんと雇われたら問題が全て解決するんですか」という、もっと大きい問題があって、そっち側も言っていかなきゃいけない。

やっぱり今、矛盾したことを同時に言う勇気が絶対必要です。だから、1つの真理だけを語るのは、むしろ現実に対応できなくなってしまうか、あるいは根本的なものに対する対応力を失ってしまう。むしろ現象的世界で起きていることに対して対応していくことと、もうちょっと深く根本的な問題を考えいく対応、それは矛盾しても構わない。そういう時代に来て、やっぱり関係の問題という根本的な問題に突き当たってくる。だから、仕事をするにしても、どういう関係の中で仕事をしていくのかとか、その仕事はどういう人々とか、どういう自然とか、どういう世界とか、そこにどういう関係を及ぼしていくのかとか、そういうことを考えながらやっていかなければいけないということにもなっていく。だから、やっぱり根本にあるものは関係だというふうに言ってよい。

今、僕、仏教という言葉を使いましたが、仏教って、伝播していった地域地域で結構それぞれまた変わっていくという性格があります。今、私たち、例えば仏教と聞いて一番身近なものはやっぱりお葬式とか法事とか、それでお坊さんに来てもらってお経をあげてもらうことですね。だけど、あんなものは仏教原理には全くない、少なくともインドで発生した仏教原理には死者供養をするという話はない。ですから、日本の真面目なお坊さんは結構悩むんですね。幾ら仏教を勉強しても、お葬式をやりなさいという話はどこにもないわけです。ましてや一周忌でまたお経を上げるということは全然ない。それなのに、日本ではあれがメイン

になっている。ですから、これでいいんですかと、真面目な人ほど悩む。

ところが、実際にお葬式を挙げたり、法事をしたりして供養をしていくというのは、仏教以前からあった日本の土着信仰の発想なんです。こちらのほうは昔から持っていた。そこに仏教が入ってくると、土着信仰と仏教が融合して、それで、いつの間にか仏教がそれをやるようになってきたということなんです。だけど、僕は仏教というのはそれでいいと思っていて、なぜなら、仏教というのは原理主義ではなくて、その地域の生きる人たちの中でつくりかえられていくという一面を持っている。だから、根本的に変わらない部分もあるけれども、変化していくものもたくさん持っている。そうすると、日本の社会では日本的仏教になっていって構わないでしょうということなんです。

では、日本的といったときに、日本の伝統的な社会観ってどういうものだったのかということ、まず1つは、社会のメンバーに自然が含まれるというのが日本の伝統的な社会観といいますか。これは、フランスなんかに行くと、とてもいい農村があるのですが、やっぱりこのあたりは日本とは違うと思う。向こうの社会の構成メンバーというのは生きて人間だけなんです。だから、実は自治というやり方が、原理的には向こうは簡単なんです。生きて人間だけが構成メンバーですから、生きて人間たちでよく議論をして、自分たちのルールを決めて実行すればいい。実際には、これをやろうとしたら大変なんですけど、原理的には簡単といいますか。

それに対して、日本の自治は面倒くさいですよ。なぜかということ、社会の構成メンバーに自然がありますから、自然の意見を入れなきゃいけないわけです。それからもう1つは、人間のほうも、生きて人間だけではなくて亡くなった人たちもこの社会の構成メンバーという社会観を持っていた。だから、自然と生者と死者の社会が日本の伝統的な社会観なんです。

そうすると、自治をする場合に、生きて人間の都合だけで自治をやってはだめなので、亡くなった人の意見も入れていかなきゃいけないし、自然の意見も入れていかなきゃいけない。しかし、会議をやっても、自然とか死者が来て意見を言ってくれるというわけにもいかなないので、そうすると、結局、生きて人間たちが絶えず死者の意見を代弁するか自然の意見を代弁するという、そういうことが必要になってくるわけです。

だけど、人間にその能力があるかということになってくると、そこで一番重要になってくるのが祭りを含

む年中行事で、絶えず祭りをやったり、いろんな行事をやったりしながら、死者を呼んだり、自然の神様をおろしてきたり、そういうことを繰り返しながら、生きている人間だけで開き直ってはだめなんだよねということを繰り返し繰り返し自覚する。だから、祭りとか年中行事というのは、僕は日本の自治の仕組みと考えてもいいぐらいだと思っていて、イベントではありません。

だから、今でもそうですが、地域が過疎化してだめになってきた集落とか、日本を探せばそこらじゅうにあります。そういう集落に行くと、ああ、この集落はまだ大丈夫だなという集落と、ちょっとここは危なくなってきたなというのがある。では、どこでそれを判断するかというと、祭りが維持できているかどうかというのが大きい。やっぱり祭りが維持できているということです。年中行事も昔のように一年中の年中行事をやっている地域は大分減ってしまった。だけど、まだその中心にあった祭りだけは維持できているということ、まだ過疎化しても、この地域はもう一度盛り返す可能性を残しているというふうに判断する。放っておけば盛り返すわけではないですが、適切に対応していくことができれば、まだ可能性は持っている。もう年をとっちゃったし、祭りも何年か前からやめちゃったみたいなの、そういう地域になると、これは今の人たちが亡くなったときはもう危ないなという感じが出てくる。年中行事や祭りを通しながら自分たちの生きる世界を絶えず再確認していくのが日本の自治の仕組みの中に含まれているということです。だから、これが重要になってくるということです。そういう意味では、ヨーロッパの自治って簡単だなといつも思っていて。

もっと言うと、例えば自然と人間の関係でも、自然が人間を支え、しかし、人間は自然を支えているという。だから、どっちが始まりかではないわけですね。だから、自然と人間が円環の関係になっている。それは、円環ということは始まりも終わりもないということで、絶えず自然は人間を支えているし、人間は逆に自然を支えているんだという、この関係で社会を捉えている。

そうすると、死者と生きて人間の関係もそうで、日本では亡くなった人たちが私たちを守っているという考え方が伝統的にはある。そうすると、死者たちが私たちを守り、私たちが死者たちを守っているという関係になって、ここにも円環の関係である。どっちが始まりだというような直線的な関係がないということですね。だから、この社会というのは、この円の中

に溶け込むように成立しているという発想になっていくわけです。だから、この社会は、どこかに始まりがあったり、どこかに終わりがあったりするわけではなくて、絶えずいろんなものが支え合いながら、1つの円をつくる。結果がまた原因となり、原因が結果となっていくような円の関係です。

このあたりの考え方は、仏教以前からのインドの考え方にもあったんですが、インドの昔の論の立て方は厄介なんです。例えば男と女というのは存在するかとか、そういう議論を昔のインドは大好きなんです。そうすると、男がいるためには女性がいないといけないと、女性がいるからあいつは男だという話になるという。今度は、女性がいるためには男性がいなければならない。男性がいなくて、あれは女性だということもないということです。ということは、男性は原因であり結果である。つまり、男性がいるという原因をつくっているから女性が発生しているという、この場合、女性は結果なわけですね。ところが、女性がいるというのが原因になって、男性がいるという結果を生んでいる。ということは、男性も女性も原因であり結果である。その原因であり結果であるというのが同時に発生するということは、論理的に成立しない。よって、この世の中には男も女も存在しないという、昔のインドの論理学はそういう方向に來たりしている。厄介な論法を立てるなという感じですが、言われてみると、ううんなんて思ったりしますけれども。

ところが、日本の場合はそれとはちょっと違うのです。絶えず私たちは原因をつくり、結果をつくるという、そういう中で、1つの円的な動きの中で、融合しながら溶け合うように私たちの生きる世界をつくっている。そういう発想が日本の社会の中にはあった。だから、私という個人もまた、その円的な動きの中で、時に原因となり、時に結果となりながら、永遠の循環をしている。こういうものとして、自分もその円環的風土の中の一員として捉えるし、社会もそういう中にあるものとして捉えていくのが日本の伝統的社会観です。そこと日本の仏教は融合しますから、日本の場合、天台宗なんか円教という言い方をしますが、円の教えという。神社なんかでもよく円がありますよね、輪をつくったりする、あれはとても重要な意味をつくるんです。全てが円の中に一体化していくという、そういうものを社会観として捉えながら、そこに自分たちの生きる世界を見ていたというのが日本の伝統的なものだった。

今、私たち、そういったものからも、もう一遍ヒントをもらい直さないといけなくなっている。まさに直線

的に、ここが原因、ここが結果みたいな生き方をして、それで、結果のところでは GDP をふやそうとか大阪万博だとかやっている。そういうことに突っ走ってきたわけですが、何か間違っただけという時代に入ってきた。そうすると、やはりもう一度、伝統的な物の考え方に一遍戻って、そこからヒントをもらいながらいくと、いいですか、今は多分そういう時代です。

うちの村でも、さっき言ったように、ペレットをつくったり発電したり、全部村営でやっていますので、そうすると、視察に来る方も結構たくさんいて、「山奥なのに新しいことをいっぱいやっているんですね」なんて、結構言われるんです。確かに新しいことをやっているんですが、実は僕は新しいことをやっているのではなくて、伝統回帰ですと言っていて、どういうことかということ、昔はみんな地域エネルギーで暮らしていたでしょう。山奥ですから、地域エネルギーの柱はまきで、あとは一部、水車が使われていた。だから、あの時代に戻ろうとしているだけなんだ。ただ、今、もちろんまきでやれる人はまきでやっていてもいいですが、一遍ペレットにすると物すごく使いやすくなるし、エネルギー効率もいい。ですから、買ってくるのではなくて、村の中で使えない木をペレット化して、地域社会で回す。これは昔、まきで回していた形、それをちょっと新しい形に変えただけなんです。もし将来的に小水力をやれるとしたら、これは水車の時代に戻るだけなんです。昔は粉ひきでやっていただけでも、今はそれを使って発電するんです。ただ、形が水車とちょっと違うけれども、やり方は新しい。だけど、考え方は伝統に回帰しているというのです。それが僕らの村の地域づくりであるといえますか。だから、今からは、いろんなところでそういうことをやりながら、自分たちの生きる世界を見つけ直すというか、それが必要なときに来ているんだというふうに思っています。



Ⅲ. パネル発表

司会/鈴木 慎一郎 これよりパネル発表を行います。ここから先のパネル発表の進行につきましては、地域学研究会副会長の家中茂教授が担当いたします。

それでは、よろしくお願いいたします。

家中 茂 皆さん、こんにちは。これから、今日の大会の第2部に当たります、パネル発表及び総括セッションを行います。

今日の午前中の冒頭でも、中原先生のほうから趣旨説明がございましたけれど、午後に入りましたので、改めてこの第2部のほう、パネル発表及び総括セッションの趣旨について御説明したいと思います。

この地域学研究会というの、地域学部に1年生の必修授業「地域学入門」というのがあって、それから3年生の必修授業に「地域学総説」というのがあります。地域学部というの、鳥取大学で全国で初めてできたと言われているんですが、では、地域学とは何だろうということや、それをずっと考えてまいりまして、それは学生と教員と一緒につくっていくものであるということ、もう一つは、地域学という言葉をつけなくても、もう地域学にふさわしい地域での活動というの、全国至るところにふつふつと起きています。その地域学的な活動から学んで、この地域学をつくっていきこう、そういう授業をしてきました。

今回の、今年度の3年生の地域学総説のテーマは、既に御紹介のように「私と地域学」ですが、また、地域学部が改組したということもあって、これまでの地域学の蓄積、歩みを改めて振り返ってみようということで、「地域学のフィロソフィー」というタイトルで、地域学総説の前半部分をやってきました。

実は、今日講演して下さった内山節さんも、その「地域学のフィロソフィー」で講義をお願いしようと思ったのですが、立教大学のほうの授業が重なってということで、これは残念、では、どうしよう、ぜひ授業と大会を結びつけるということで、今回の今日の大会の基調講演をお願いしました。

そういうことですので、「私と地域学」ということを、フィロソフィーというのですか、ものの考え方として、今年の前期の授業で進めてきたのですが、そのとき、とても大切なことは、どうやって地域にコミットメントするのか、自分たちが考えてきたことを、地域の中でどうやって現実にあられるのだろう、そういうことがとても大切だねと。特に、私たちもそうですが、学生にとっては生活の場で、あるいは卒業して仕事をするなかで、やっぱり地域学というものを生きていってほしいということ、この企画を立てるなかで考えてまいりました。

そうはいつでも、あんまり大上段に考えるのではなくて、自分たちの身の回りの「地域の身近な小さな変化」というものに気をつけてみよう。例えば、いつも散歩しているこの道が、何かとても気持ちがいいな。ごみが落ちてないし、あるいは水をまいたような様子がある、あるいは、ほうきで清めたような雰囲気があるとか。でも、そういう身近な小さな変化の後ろにはきっと人の営みがあるはずだ。その地域の中での、まさしく今日の内山さんのお話にあったような、何かしら自分たちの場をつくっていきこう。そこには、そういう小さな身近な変化を起こしたつながりがきっとあるはずだということに気づきまして、では、そういうことを人間形成コース、国際地域文化コース、地域創造コースの各教員から、そういうことだったら、私はこんな人を知っているよ、こんなことをやってみたいね、やっている人がいるよというのをそれぞれ紹介してもらって、それで、この午後の部をつくりました。

そういうわけで、どういってお話が聞けるかというのを、私もとても楽しみにしております。これから3人の、あるいは3グループの御報告がありますが、それぞれの御紹介は、この方がいるよ、こういうお話を聞きたいよというふうに提案して下さった先生に紹介していただいて、そのお話を30分ずつ聞きます。

それから、休憩をおいて、提案をした教員と、それから話してくさった方々に壇上に上がってもらって、フロアの皆さんと一緒に、今日のテーマをめぐって、気がついたこと、感じたことをシェアしていきたい。これも一つの地域学、地域学部という場を通じての関係づくりだと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。では、畑先生、お願いします。

畑 千鶴乃 改めまして、鳥取大学地域学部の畑千鶴乃と申します。今から御登壇いただきますパネリストの藤田先生を御紹介させていただきますと思います。

藤田先生は2017年3月に本学を御退官されまして、それにあわせて御自宅をリノベーションされて、鳥取で一番小さな保育園を立ち上げられました。その名も「ゆりかご保育園」、そのゆりかご保育園のネーミングについても、藤田先生からまたお話があるかと思えます。

今、家中先生から御紹介がありましたように、このたびの地域学研究会大会は、こうなったらいいなというような人々の願いや思いが地域の中で形になっていく、あるいは地域の中に身近で小さな変化を見詰める、それがもしかすると大きな変革につながっていくかもしれない、そんな営みをフロアの皆様と語り合いたいと思って企画されたものです。

今からお話しいただきます藤田先生のゆりかご保

育園の立ち上げは、まさに地域に根差した身近な、ですが、地域における確かな変化だと思っております。そんな御実践から私たちは何を学ぶべきか、皆さんと一緒に考えていきたいと思っております。

それでは、拍手をもって藤田先生をお迎えしたいと思います。藤田先生、どうぞよろしくお願いいたします。

発表 I 「小さくてもキラリと光る保育園をめざして」

藤田 安一（「ゆりかご保育園」園長）

1. なぜ保育園をつくったのか

僕の定年退職を契機に、妻や娘とともに自宅を活用して保育園をつくることにした。

もともと、この構想はかなり以前から、妻と娘の間で話し合われていたものだ。後で聞いたことだが、若い頃に保育士をしていた妻と、子どもが好きで保育士になりたいという娘が、「この家で保育園が始められたらいいね」と夢のような話をしていたという。当時は家庭で保育園がつかれるとは思っていなかったからだ。

しかし、インターネットで調べていくと、2015年の「子ども、子育て支援新制度」によって待機児童対策として地域型保育が新設された。そのなかに「家庭的保育」の設置が制度化されているのがわかった。託児所やベビーシッターではなく、市町村の許認可のもと自宅で保育園が開設できる。そこで、妻と娘が市役所に行き開園にむけて相談することになった。

最初は市の担当者も、この制度についての理解が浅かったので、「保育士資格を持っているのであれば、どこかの保育園に勤めたらいかがですか」と言われたそう。このような答えが返ってくるのももともとで、家庭的保育の開設が本県では、まだ1例もない。したがって、お互いに、そもそもこの制度の学習から始めるをえなかった。

僕が妻と娘の仲に入って、保育園をつくるように具体的に動きだしたのは定年退職した2016年の4月以降のことである。

それまでも、僕が担当した中国の留学生が、結婚して子どもが生まれても預ける保育園がないので困っていると相談を受けたことがあった。保育園を落とされてしまったのだ。なるほど、はるばる本国から、しばらくの間はお母さんに来てもらえるが、期間が短いので、その後の子育てに困っているという話だった。それに、僕の現在住んでいる鳥取大学にある鳥取市湖

山町は、若い人に人気の地域で保育園が足なく待機児童も多いと聞かされていた。

こうした経験もあって、本格的に自宅を開放して保育園をつくることにした。



2. いよいよ開園にむけて

そこで、市の担当者に家庭的保育園をつくる意思を伝え、開園にむけて設置基準をクリアするための準備にとりかかった。

幸い、僕の家は事情があって2世帯が住めるように13年前に新築したものだ。当時は、今は亡きパーキンソン病をわずらっていた母が同居できるようにとバリアフリーにした。庭にはスロープも付け、車椅子のままでも室内に入ることができる。室内もフラットで、2階へ登る階段以外はどこも段差がない。

このような家の造りが、保育園にとって好都合になるろうとは、当時思いもしなかった。2世帯住宅のために、工夫によっては1世帯分まるまる空けることができる。そこで、僕たちの住居スペースは家半分に移り、残りの半分の一階を全て保育のためのスペースとした。そこにあったトイレと手洗い場も子ども用に改築した。僕のささやかな退職金も、このために役だったというわけだ。タイミングが良かった。

自宅を改築したといっても、もともとトイレや手洗い場であったところなので、子供用に器具を取り替えたにすぎない。費用も安価で工事期間も短くて済んだ。

幸運なことは、もう一つある。僕の家から、たった10メートル先に大きな公園があることだ。そこには、さまざまな木々が生き茂り、四季折々の草花が咲く。さらに、この公園の傍には芝生をはりつめた広いグラウンドもある。遊具も設置されている。子どもを育てる自然環境に恵まれている。

だが、困ったことも多くあった。まず、山のように申請書類を揃えなければならない。行政から示された提出書類のリストにしたがって、新しくつくる保育園

の保育計画書、運営規程、就業規則、経理規定、勤務表、給与規定、緊急時の対応マニュアル……などを作成する。これは娘が作ってくれた。老夫婦だけではとうていできるものではない。

他方で、市役所、銀行、税務署、水道局、消防局などへ出かけ、家屋の登記簿の写しや家計状況、預金残高や納税状況を証明する書類などを取り寄せた。こうして東奔西走し、やっと開園の許可審査の日時まで準備することができた。

子どもの離乳食を作ってもらうため、調理師さんも雇った。保育に必要なベビーベットやベビーカー、遊具、絵本、哺乳瓶なども揃えた。そして、市の書類審査や現場検査もクリアして、今年2017年2月に無事開園することができた。

家庭的保育は、規定によって3歳未満児が対象で定員は5人までと決まっている。現在、その定員の5人(0歳児1人、1歳児2人、2歳児2人)を預かっている。名前は「ゆりかご保育園」とした。あの「ゆりかごの唄」にちなんで、小じんまりとして暖かい雰囲気のある保育園であるということの名前でイメージしたかったからだ。

5人の子どものなかには、留学生や鳥取大学の教員、教育学部時代に僕が教えた学生の子どもがいる。偶然とはいえ、退職しても鳥取大学とは何かと関係が続いている。

時々、開園の話が聞かれた方から、「家族で仕事ができてうらやましいです」と言われることがある。確かに、一日の仕事を終えると、ひとしきり子どもたちの話になり、家族どうし笑いが絶えない。しかし、仕事の最中では、こうはいかない。

僕は一応「園長」になっているが、管理者であり保育の補助者にすぎない。保育の現場では、保育の専門家であり経験者である妻と娘にアゴでこき使われる。妻には、これまで苦勞をかけたので、その罪ほろぼしとして我慢しているが、娘にまでそうされるのだから、たまったものではない。父親の尊厳は今や風前の灯である。

なんと、一日が長く感じたことか。大学に勤めていた頃は、あっという間に時間が過ぎた。しかし、保育園を始めてから1年も経っていないのに10年も時が流れたかのように感じる。毎日が僕にとって新しいことばかりだったからだ。歳をとるにつれて時間の感覚は早まるというが、僕の場合、ちょうどそれとは逆になった。試行錯誤の長い毎日が当分は続くだろう。

ともあれ、「小さくてもキラリと光る保育園」をめざして、新しい保育園はスタートした。それから1年が

経とうとしている。他の保育園ではみられない「家庭的保育」だからこそできるものはなにか。実践をつうじて、少しずつわかってきた。最後にそれをまとめておこう。

3. 小さな保育園だからこそできること—ゆりかご保育園の特徴

(1) 子どもが安心する生活環境づくり

小さいからこそできること。家庭的保育では、まず何よりも、乳幼児が安心して生活する環境が与えられというメリットが大きいことだ。これは、ゆりかご保育園を運営する時に最も気をつけていることである。

一般の保育園に入ると、いきなり何十人もの子どもと生活することになる。いままでの両親との落ち着いた生活が一変する。それに戸惑って登園できなくなる子どもが少なくない。

それに対して、ゆりかご保育園では、子どもが少ないので、急激な生活環境の変化は避けられる。また、子ども5人を家族4人で保育するので、行き届いた保育ができ、子どもにとっていつも決まった人が相手をしてくれるという安心感がある。

しかし、一般の保育園では保育士が過重労働・低賃金が原因で途中で辞め、人の入れ替わりが激しい。しかも最近では、非正規保育士が増え、短時間でシフトを組みながら勤務する形態が普通になっている。そうすれば、ますます子どもにとって親しみのない保育士が相手となり、落ち着いた状態を享受できないことになる。

ちなみに、以上の保育士の多忙化と非正規保育士の増加は、保護者にとっても大きな問題となっている。

それは、一日のわが子の状態を聞ける人がいないということにつながる。保育士1人当たりの子どもの多いことに加えて、一日を通してその子の状態を保護者に告げる保育士がいないし、どの保育士にそれを聞いたらいいかにもわからない。急がしそうにしている保育士に、つい声をかけづらいと不満をいう親も少なくない。

その点、ゆりかご保育園では、保護者と十分な対話をするようにしている。保護者とのコミュニケーションの方法は、「お便り帳」でも行うが、それでは不十分だ。紙面の都合で書ききれないことがある。直接言わないと真意が伝わらないこともある。

なによりも、その子が昨日までできなかったことが、今日突然できたことなどは、ありのまま生き生きと保護者に伝えたいと思う。それには、保護者とゆっくり対話する時間が必要だ。

(2) 子どもの状況に応じた保育づくり

ゆりかご保育園では、園の都合で、日課を子どもたちに強いることはしない。その子の状況に応じた保育をするように心がけている。

登園してからの子どもたちの様子はさまざまだ。絵を描く子、積み木やブロックを積み上げる子、絵本を読む子、それぞれに熱中している。だから、この間は、なるべく他のことに注意を向けさせるようなことはしない。



子どもがしたい時にしたいことをすることが、その子の達成感を育み、好奇心を育てることになるからだ。

食事時であっても例外ではない。絵を描くことに熱中しているのに、それを中断させて食事をさせることはしない。その子の遊びが一段落する頃を見計らって食卓につける。

散歩に行く時もそうだ。その子が家の中でやりたいことがあるのに、外へは無理に連れ出さない。行きたくなってから、保育士がその子と外に出て、みんなと合流して遊ばせるようにしている。

また、ゆりかご保育園では、保育園に置いてある絵本の貸し出しもおこなっている。

僕の娘が保育園にかよっていた頃を振り返って、次のように言った。

「それまで保育園で読んでいた絵本を、お母さんが迎えに来たために読めなくなったことが悔しかった」

この言葉を聞いて、ゆりかご保育園では絵本の貸し出しをしようと思った。

保育園には、たくさんの絵本があり、登園した子どもたちは自分たちの関心に応じて読んでいる。夕方になり、保護者が迎えに来て、夢中になって読み続ける子がいる。

確かに、迎えはうれしいのだが、読みたい欲求も抑えられない。このままでは、読むことを中断して帰ら

なければならない。そこで、その子は読んでいた絵本を自宅にもって帰るとゴネて泣いてしまう。

せっかく、保育園で楽しく過ごしたのに、終わりがけにこうなっては残念だ。そこで考えたのが、絵本の貸し出しだ。希望すれば、貸してあげる。これも子どもが少ないからできる。多い保育園では、こうはいかない。

また、ゆりかご保育園では、子どもが自宅ですべて使ったものを保育園にもってきても良いことにしている。

多いのが、ぬいぐるみや絵本、車のミニチュアなど、その子が赤ちゃんの時から使っていたものや、現在とても気に入っているものだ。保育園に行くために、それを自宅に置いていかなければならない不安な子どもの気持ちはよくわかる。

したがって、その不安な気持ちを和らげる処置。一種の精神安定剤だ。これは、家庭の延長として、また家庭の雰囲気大切に家庭的保育にとって大切なことで、ゆりかご保育園のきわだった特徴といえる。

なるほど、家にあったものを保育園にもってくれば、それをめぐって他の子どもと取り合いになり、けんかに発展するかもしれない。また、それを保育園で失くせば園の責任となるだろう。なにかとトラブルの元だ。

小さい保育園でも、そのリスクは免れられないが、今のところ、僕の保育園ではこうしたことは起こっていないので、これからも続けていきたいと思っている。

(3) その他の特色ある保育

ゆりかご保育園では、人数が少ないので、あえて子どもたちをまとめることに気をつかう必要はない。たとえば、散歩の時や食事の際にも、そうであることは前述したとおりだ。大きな保育園であれば、誕生会では通常その月に誕生を迎える子どもたちと一緒にして、月の初めに会を設けてお祝いをする。しかし、ゆりかご保育園では、その子の誕生日に合わせて誕生会が開けるというメリットがある。

また、うちの園では、0歳児から2歳児までが同じ空間で保育を受けている。他の保育園のように、歳毎にクラス分けはしていない。いや、園児はたった5人なので、そもそもクラス分けなどできないのだ。そのために、日常的に歳を越えた子どもたちの交流がある。

家庭では一人っ子が多い。ゆりかご保育園では園児5人のうち、兄弟姉妹がいない子が3人もいる。だから赤ちゃんが珍しいのであろう、ミルクを飲ませていると、ほ乳瓶をもって自分が赤ちゃんにやろうとしたら、「いない、いない、ばー」をしてあやそうとする。

一般の保育園では決して見られない光景である。

4. 地域のなかの「ゆりかご保育園」

さらに、ゆりかご保育園が地域に果たす役割について触れておきたい。微力ながら、地域における待機児童解消に役立っていることは間違いあるまい。また、少子・高齢化している地域において、保育園の存在と子どもたちの姿が、ほほえましく地域に映っていれば幸いである。

しかし、全国的には最近それと反対に、地域住民から保育園建設反対の声が起きる場合もある。なるほど、簡素な住宅街で大きな保育園がつけられれば、住民にとって迷惑となることもあろう。しかし、ゆりかご保育園は園児5人であり、子どもの多い家庭と変わらない。

子どもを連れて散歩する私たちを見ると、寄ってきて「バイバイ」と声をかけ、笑顔ですれ違う人が多い。なかには、子どもたちと握手し、頭をなでていく高齢者もいる。ほほえましい光景だ。

時々、近所の小学生が僕の保育園に遊びに来る。小学1年と6年の兄弟だ。平日でも学校から帰ってきて、まだ園児が残っていると保護者が迎えに来るまでの間、子どもたちと遊んでくれる。夏休み期間中には、彼らは度々保育園に来て、子どもたちと一緒に絵を描いたり、ボール投げをしたり、おもちゃで遊んだり、お兄さんぶりを発揮していた。

「家庭的保育」とは聞きなれない名前であり、しかも、鳥取県初の家庭的保育園であるためマスコミが報道したこともあって、ゆりかご保育園に視察に来られる団体や個人も少なくない。

つい最近、近くの高校の先生から、高校生をつれてゆりかご保育園を見学したいとの申し入れがあった。当日、高校1年の4人の女子学生と先生1人、計5人



の訪問を受けた。保育室など案内しながら、一通り説明したあとで、テーブルを囲んで歓談した。

その席で、僕がこの高校生に感心したのは、彼女たちが事前に家庭的保育制度について調べて正確な知識をもっていたことだ。さらに、家庭的保育を調査する目的と意義をはっきりさせていたことには驚かされた。

彼女たちの調査の目的は、待機児童解消のために地域の空き家を活用できないかというもの。そのためには、家庭的保育制度を利用することが良い。そして、保育の担い手として高齢者をあてる。高齢者は保育の経験もあり、高齢者自身の生きがいにもつながる。こうして、空き家を利用して家庭的保育を広めることは、待機児童解消、空き家活用、高齢者の生きがいとなり、まさに一石三鳥だ。

この高校生のアイデアに対して、まずは自分たちでよく考えたことに敬意を表した。そのうえで、空き家は古いものが多いので、子どもたちの安全を確保するためかなりしっかりした改築を必要とすることと、高齢者が保育に携わる場合においては、経験があるからといってそれに頼らず、最近の新しい保育の知識と技術を身につける必要がある、とのコメントを高校生に返しておいた。

その後、彼女たちとのフリートークとなった。保育園を選んで訪問に来るだけあって、いずれも現在の社会保障に関心をもっていた。将来は、保育士や看護師になりたいとのことであった。それだけに、真摯な態度で保育園を訪問してくれたこと、そして彼女たちに何らかの役に立てたことを嬉しく思った。

5. 「ゆりかご保育園」の理念について

以上、ゆりかご保育園がスタートして、これまでの短い間で実践し、そのなかで形成してきたゆりかご保育園の特徴について述べた。最後に、これらの特徴を根拠づけているゆりかご保育園の保育理念について触れておきたい。

現在、待機児童対策が声高に叫ばれている。これまでわが国が子ども・子育てを軽視してきた政策のつけが集中して現れている現象だ。ようやく最近になって本気モードになってきた感がある。

しかし、その基本は規制緩和による既存の保育園への定員増による詰め込み保育や、もっぱら営利を追求しがちな株式会社による保育園の増加にある。これらによって、近年、待機児童の減少がみられるが、子どもたちは一層劣悪な環境に置かれるとともに、保育士の労働条件は一層悪化し、低賃金と待遇改善にはつな

がっていない。それが現在、保育の質の低下が心配される大きな原因となっている。

こうしたわが国の保育の現状を改善して、子どもが良好な保育を受ける権利をいかに保障するかが真剣に問われなければならない。保育環境が悪いために乳幼児が毎日強いストレスにさらされると、頭の前頭前野部分が萎縮し、生涯にわたって人格形成に悪影響を与えるといわれている。それが正しいとすれば、「三つ子の魂百まで」という諺は、決して大げさとはいえない。

子どもたちのこの重要な時期に、保育者として負っている責任を今一度自覚し、ゆりかご保育園を「小さくてもきらりと光る保育園」として、その存在意義が発揮し続けられるよう大切に育ててゆきたい。

畑 ありがとうございます。では、時間の関係でお一方ぐらい、質疑応答の時間として少し持たせていただこうと思いますが、いかがでしょうか。この後、討議の時間がありますので、確認の意味で何かこの段階でこの点について説明をしてほしいですか、ございませんでしょうか。

会場発言 民政児童委員をさせてもらっています。お世話になります。5人のお子さんに対して、専門家の方が何人いらっしゃるかと、4人の見られる方をつけるとか何かそういう法的というか、行政からの指示とかそういうことがあったら、もし後でもいいですが教えてください。



藤田 配置基準といまして、保育士が見られる子供の数は3名、この形であると3名です。保育士が2名いない場合には、子育て支援員というのをつければ2名追加することができるということで、うちの場合には妻が保育士であると。そして、娘がその保育士を取るために今勉強しているのですが、子育て支援員になっています。これはちゃんと研修を受けて、そして実習もやってという、私も実はそれをしてきました。その

研修を受けたときにびっくりしたのですが、塩野谷先生、そして畑先生が講師をされたと。私以上に先生方がびっくりされたと、なぜ私がそこに研修に来ているのかと。退職したのだから暇なのだろうというふうに思われたかもしれませんが、私はもう真剣そのもの。この研修員にならないと保育園を開くことができないということで、そういう意味で基準は満たしているということです。

会場発言 1名の専門家の方に対して、お子さん2名という感じですか。

藤田 3名ですね。あとの2名は研修員、支援員ということです。

会場発言 研修員さんは1人の子供さん。

藤田 2人です。だから、補助者という形になるんですね。保育士に対して、保育士の補助ということで、支援員という資格を取れば2名見ることができます。だから、うちの場合には支援員は3名いるんです。そして保育士が1人。もう1人の娘は手伝ってくれていますので、下の子と上の子とですよ。それも支援員を取りましたので。というふうに十分満たしているというふうに思ってください。

会場発言 調理師さんというのは、何ていうんですか。

藤田 パートをお願いをしました。10時に来てもらって、そして午後1時まで。その間に食事をつくってもらったり、デザートをつくってもらったり、3時のおやつをつくってもらおうと。

会場発言 それも調理師さんでないとだめなんですか。

藤田 いや、そうではありません。そうではありませんが、うちの場合には家族は忙しくしておりますので、調理師さんをお願いするということをお願いをしました。募集をして来ていただきました。

会場発言 ありがとうございます。はい、わかりました。

畑 ありがとうございます。それでは、次のパネリストの方にバトンパスしたいと思います。川井田先生、よろしくお願いいたします。

発表Ⅱ「今時代が求めているもの

—発掘と利活用—

福井 恒美 ((株)鳥プロ・CEO, リアルマック・代表, IJU 大学・代表)

川井田 祥子 では、二人目のパネリストを御紹介します。倉吉から来ていただいた福井恒美さんです。福井さんは、株式会社鳥プロの経営だけでなく、リアルマックという非営利活動団体の代表もされており、さ

さまざまな地域貢献活動を展開しておられます。もともと倉吉のご出身で、大学卒業後に東京でお仕事をされていたのですが、Uターンして倉吉に戻られて、今はいろいろなつながりをつくろうという実践をされている方です。それでは福井さん、よろしく願います。

福井 皆さん、こんにちは。リアルマックの福井恒美といいます。今日お話しするためのスライドを早めに用意したんですが、ちょっと失敗したかもしれません。タイトルは「時代が求めているもの～発掘と活用～」となっていて、地域学の話をして、地域学、つまり忘れ去られていることや大切なことを発掘して再利用したり、アクションを起こしていこうという、そういうものが今の時代に求められているのではないかと思って、僕なりの言葉でこれからお話をさせていただきます。

まず、僕のプロフィールです。スライドに「IJU交流デザイナー」と書いてありまして、この「IJU」は「移住」と読みます。皆さん、山崎亮さんという方をご存じですか。コミュニティデザイナーの山崎亮さん。何回かお会いしたことがあって、彼から「福井さんも何か名前を考えたほうがいいですよ」と言われたんですね。それで「次に会うときまでに名前を考えておきます」と言ったのが5～6年前です。僕は7～8年前から、鳥取県へ移住されてくる方の応援やサポートをずっとやってきました。移住にはIターンやJターン、Uターンがありますね。そういういろんな形で鳥取県へ来られる移住者の交流会を始めたし、それをデザインしているので、「IJU交流デザイナー」としました。次に山崎さんと会ったとき、「亮さん、つくったよ。IJU交流デザイナーにしたよ」と言うと、「うまいねえ」といって褒めてもらいましたが、何ももらってません。皆さんも何か自分の志や思いなど何かあったらペンネームというか、自分なりの肩書を何かつくってみるのもおもしろいですよ。

今、僕は61歳です。皆さんのお父さんやお母さんよりちょっと先輩になるのかな。僕は倉吉市出身で、今から12年前に東京から倉吉へUターンしてきました。家内はIターンです。だから、Iターンの気持ちが僕にはわからないけれども、家内の方がいっぱい悩みがあったので、それで交流会を始めようかなと思ったんですね。東京で何をやってたかという、商社勤務です。毎日1時間半ぐらいかけて通勤していました。朝7時20分にうちを出て、帰ると11時半ぐらいの毎日でした。土日ほとんど仕事でした。だから、駅のホームで流れる「白線の内側までお下がりください」というのを毎日聞いていました。乗り換えのたびに



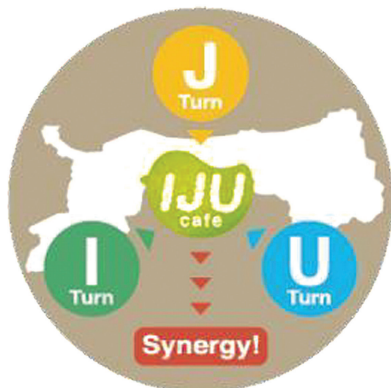
谷で聞いて、新宿で聞いて、また次の駅でも聞いて。それも行き帰りに聞くわけです。毎日聞いていると慣れてしまって何とも思わないんだけど、20年ぐらい経って子どもが大学を卒業して就職した頃に、ふっと思ったんです。「毎日こんなことをやっていたのかな」というよりも疲れちゃったんですね。気がついたときには、疲れていました。僕は長男で、両親も結構いい年になっていたの、もう帰ろうかなと思って49歳のときUターンしました。帰ると、テレビで芸人の中川家が出るたびに思い出しますね。「白線の内側までお下がりください」をもう聞かなくていいんだと。ところで、僕の本業は花屋さんです。花屋をやっているながら農業が好きなので農業もやっています。それが本業ですけれども、他に活動として地域のコミュニティをつくったり再生したりしています。地域振興というところ、ちょっとオーバーですが、イノベーション、新しい革新的なことについて勉強しながら実践もしています。

いろいろな活動をやっているの、具体的に紹介します。まず、IJUカフェ。移住してきた人たちが集まってつながっていくカフェ、そういう場を鳥取県内各地で設けています。西部の日野、日南町、東部は智頭町など、さまざまな場所で何十カ所もずっとやっています。カフェというのは人々が気楽に集まれる場所のことで、喫茶店のように固定した場所ではなく、イベントとしてやっているのがIJUカフェです。この活動を続けることで、シナジー効果が生まれてくるんです。参加者の中には結婚した人もいます。離婚した人もいますが、まあ、つながって離れる、広がっていくという意味でね、子どもも生まれていますから人口増加に貢献していますよ。

次に紹介するのは、軽トラ市。移住者たちが早く地域に溶け込めるような仕掛けが必要だなと考えて、NPO 田舎暮らしの応援団という組織を立ち上げました。何をしたかという、だいたい農家に1台は軽トラック

がありますから、規格外の野菜や市場や農協に持って行って残ったものなど、それをコンテナ単位で軽トラックに載せて集まってくださいと農家さん5~6軒に声をかけて、多いときは10台ぐらい来ましたが、それで軽トラック市というのをやりました。これは本当にフェース・トゥ・フェースで、作り手と買い手が直接会って販売し、買って行く。そういうことを続ける中でコミュニティが出来上がっていくので、みんな楽しみにしていました。今は、浜根農園の浜根君が引き継いで時々やってくれています。

次に、リヤカー市というのもやりました。逆ではないかと思えますよね。技術の発展を考えると、リヤカーがあって軽トラックですよ。でも僕の場合は逆なんです。軽トラ市をやっていたら、おばあちゃんが若い男の子と来て、「やっとななるのは知ったけれども、私は足が悪いでよう来なんだ」と。「でも、今日は孫が休みでおったから乗せてきてもらったが」と言われました。そのとき思ったんです、僕が幼い頃のことを。僕はおばあちゃんっ子だったんですが、おばあちゃんは毎日のように魚屋の行商から魚を買っていたなど。そのときは確かりヤカー、大八車じゃなくて、長いリヤカーだったなと思い出しました。そして、「歩くのが大変だったら僕が持って行ってあげる」と言ったんですよ。すると彼女は「道が狭いので車は通れない」と言うので、やっぱりリヤカーしかないよねと思って、リヤカーがないかと周囲に一生懸命呼びかけて、やっとリヤカーが見つかったんです。でも、ボロボロでタイヤはパンクしているし、サビだらけだったので、なんとか修理して使えるようにしました。それで毎週日曜日の9時から12時半ぐらいまで、そのおばあちゃんのところに行くのはもったいないので、野菜をいっぱい積んで通る道を決めて行くようにしました。するとだんだんお客さんがついてきて、喜んでもらったのでリヤカー市を続けていました。そのあと、もう少し後で話しますが、リヤカー市はカーゴマルシェという事業につながっていきます。



次の写真はIJU大学、これは市民大学です。今は180人ぐらいの登録があって、幽霊学生もいますけれども、特に活発なのが農学部、これは勝手に名乗っていますが、自然栽培米を6年ぐらいつくっています。無肥料、無農薬で、除草作業もほとんど全部人力でやっています。ときどき、起業塾というコンサルタントの先生を呼んで真面目な勉強をしたりしています。最近では学生同士でコラボレーションしてイベントを、ワークショップやライブなど、いろいろなことをやっています。ちなみに、明日は学生の1人が呼びかけて、スマホでホームページをつくる講座を行います。呼びかけたのは大阪から移住してきた男性で、ITをすごく勉強している人なのでそういうスキルを持っているんですね。いろいろな移住者がいるので、メニューもいろいろです。

次は、先ほどのリヤカー市から発展した、くらしカーゴマルシェです。僕たちは2ヶ所基地があって、成徳地区の基地を鳥の杜、明倫地区の基地を大鳥屋という、両方に「鳥」をつけています。なぜこうなったかと言うと、リヤカーは重いので女性に手伝ってと頼んでもダメだったからです。重たくていやだとか、格好悪いとか、雨が降ったら雨合羽に菅笠をかぶるので「そんなのはできない」と言われました。おまけに黙って道を通っていてもわからないから豆腐屋のラップを吹きながら行くので、「チョーカッコ悪い」と言われて誰もやりたがらない。自分一人で2年ぐらいやりましたが、続けていくために女性スタッフにもやれる方法はないかと考えました。そしてインターネットで調べて、荷台付きの三輪自転車を見つけました。でも、これ、ヨーロッパにしかなかったんです。どうしようかと思いましたが、さらに調べると鳥取県と日本財団さんがプロジェクトを組んでいたもので、そこに支援を依頼したら、どうぞどうぞということで2台購入することができました。そして女性用のユニフォームもつくって、「これだったらかわいい、やりたい」と言ってくれて、僕がいなくてもできるようになりました。でも僕も相変わらず、カーゴマルシェで回っています。うちは花屋で花もあるのですが、野菜を仕入れると高いので自分たちでつくったり、親がつくった野菜を安く入れたり、それから前の軽トラック市でお世話になった農家さんから安く仕入れたものを積んで、高齢者の多い通り、だいたい2キロぐらいの道のりをずっと回っています。回っているのは高齢化率40%ぐらいの、市街地なんだけれども空洞化が進んでいるところ。空き家や空き店舗が増え、それから少子高齢化や核家族化が進んでしまって、昔は活気があったけれども今はなくなった場所です。買い物に困っているおばあちゃんやご家族のために回っています。

ちょっとここでエピソードを紹介します。僕たちがカーゴマルシェを始めたのは2年前の9月で、2ヶ月もたたないうちに地震がありました、10月21日に。その日も僕たちは午前中にカーゴマルシェをやりました。女性スタッフがやって、3日後か4日後にやる予定にしていたので、その女性から23日頃に電話があって「福井さん、どうしますか」「だめだよ、余震があって危ないからできないよ」「では、私一人でも行きます」「どこに?」「いつも買ってくれるおばあちゃんが独り暮らしで心配だから行く」と言うんです。そう言われたら僕も「じゃあ危ないから、いつものベレー帽を脱いでヘルメットに替えて行こう」ということで安否確認に行きました。それで回っていると、ちょうどNHKの「シブ5時」という番組スタッフとばったり会って、何やってんですか、かくかくしかじかこうですと言うと、それがきっかけになっていろんなメディア、新聞、テレビ、ラジオに取り上げられました。本当に「シブ5時」様々ですね。あれがきっかけになって、一昨年も去年もかなり紹介していただいたおかげで、この活動が広く知られるようになりました。



その次の年は大雪になりました。すると、おばあちゃんたちからいろんなお願いごとをされたので、できるかぎり頑張りました。まず雪かき、それから要らないものも片づけてと頼まれて片づけました。中にはすごく重たいのもあって、たとえば将棋盤ってすごく重たいんですよ。それを2個持って帰ってくれと言われて、「ええっ! 2個ですか?」と言いつつ、ありがたくいただきました。すると、もう一回来てくれと言われて、何だろうなと思って行ったら、これですと言われたのが座布団10枚。笑点じゃないんだからと思いましたが、喜びました、うれしかったですね、使えますから。そんなふうに、やれることをやっていると、リターンもちゃんとありました。モノをいただくというだけじゃなく、気づいたらそういう関係になっていたことがうれしいですね。

最近では、ワーキングホリデーやインターンシップを体験したいという高校生たちが増えてきました。行政からも体験させてあげてくださいと言われます。いろいろコミュニケーション能力が身についたり、地域の課題なんかも目の当たりにできますし、いろいろ学ぶものがあるわけです。つい最近ですが、環境省から電話があって「グッドライフアワード2018」という表彰制度の中で、環境社会イノベーション賞をいただきました。

そして、環境社会イノベーションがあるのだったら、地域社会イノベーションもあっていいのではないかと思ったんですね。地域社会での新しい軸というか、革新的なことは何だろう、その前にまず地域のゴールとして求められるものは何だろうと僕なりに考えてみると、豊かな経済と安心で安全な持続可能な地域社会の仕組みをつくることができれば、それがゴールだろうなど。なんといっても持続可能になっていかなきゃだめですよ。そのためにも豊かなコミュニティが必須だろうなと思いました。そのためにチャレンジすべきだと思ったし、チャレンジするには地域課題や問題がヒントになる、さらにそういうものを解決するためのイノベーションが必要になってきます。イノベーション、革新的なことはソーシャルデザイン、あるいはソーシャルビジネスと言っているのかもしれませんが。町は生きています、空き家でも再生されてリノベーションされていくところもあれば、解体されて空き地になったり駐車場になったりするところもある。だから、数年前の観光マップみたいなものはリアルではないんですよ。本当のソーシャルデザインというのは、リアルでないといけないと思います。さらに人というのも資源だろうなと思います。移住して起業する人も含めてね。もちろん建物もそうだし、自然も文化も風習も風土も全部資源だと思います。そういう資源を見える化する、そのためには掘り起こしが必要だし、アンテナを立てていないと掘り起こしもできないし見える化もできない、つまりデザインができない。

そしてビジネスです。ビジネスとは人が喜んだり、簡単で便利だと感じるようなもの、何かの問題を解決することがビジネスになります。たとえば、ここを何とかしたいなという物件があって、移住してくる人にこういう使い方をしてもらおうと起業を促したり、雇用が生まれたりするようなビジネスチャンスをつくっていくことも重要です。要は、コミュニティを再生することや新たに創り出すこと、これらが問題解決につながっていく。でも、空き家や空き店舗の活用というのはそんなに簡単ではないです。ご先祖の仏壇があるし、思い出の品物があるし、息子たちが年に2回ぐら

い帰ってくるから嫌だとか、なんか軒下を貸すと全部持っていかれちゃうような気がして嫌だとおっしゃるおばあちゃんやおじいちゃんは実際にいらっやいます。でも、あきらめないで、僕たちの活動を通して少しずつコミュニケーションをとって行って、理解してもらうようになれば利活用につながるチャンスはあります。

もう時間がないので最後です。可能性とか将来性とかポテンシャル、こういうものがどれだけ町にあっても1ミリも変わりません。あるだけでは変わりません、動かないと。だから、見落とされている資源があればそれを掘り起こして生かしてみる、まず動いてみるということが大切だなと思います。



また、30年前からまちづくりは人づくりと言ってきました。僕も青年会議所のときに先輩から言われました。「おい、福井、まちづくりは人づくりだぞ」と、格好いい言葉ですね。本当にそうなんです。でも、その次に“コトづくり”をやしましょう。そのためには「他人事から自分事へ」とよく言われます。それをもう一歩進めて「自分事から自分たち事」にしなきゃだめですよ。でも“自分たち事”というのは、ここにおられる皆さんや僕たちの自分たち事ではないのです。ここに来られない人、うちに帰ったら親兄弟がいるじゃないですか、そういう人たちも含めての自分たち事として考えられるかということだと思います。そんなことを考えながら、小さなアクションでもいいから、動けば少しは変わるかもしれませんよというのが、今の時代に求められているものではないか。忘れていたものや気づいたことがあればそれを発掘して活用していきましょうということです。ご清聴ありがとうございました。

川井田 ありがとうございます。

発表Ⅲ 豊岡市「地域フィールド演習」

新谷陽香・盛田実優（国際地域文化コース）

飯田菜生・釜田朋夏・小林あまね（地域創造コース）

竹内 潔 では、学生は準備を始めてもらって、準備している間に私のほうから簡単に紹介したいと思います。私は地域学部地域創造コースの教員であります竹内と申します。

今から発表するのは地域学部の1年生になります。何度か紹介があったとおり、地域学入門という前期の授業において、6月20日に豊岡市長にこちらで御講演いただきまして、それを聞いた学生、1年生は約180名いるのですが、全員が必修の授業で、その中から現場に行ってフィールドワークしたい学を募りました。その結果、9名が集まりました。その9名のうち、ごらんいただいた方もいるかと思いますが、4名は今回ポスター発表ということで別の部屋でポスターを貼ってもらいまして、残りの5名がこちらのプレゼンテーションのほうを選びまして準備をしてくれました。こういった発表、こういう公の場での発表は初めての学生がほとんどですが、頑張りますので温かく見守っていただければと思います。それではマイクを渡したいと思います。よろしくお願いします。

新谷 こんにちは。私たちは鳥取大学地域学部地域学科国際地域文化コースの新谷陽香と盛田実優と、地域創造コース、飯田菜生と釜田朋夏と小林あまねです。

前期の必修科目、地域学入門において豊岡市長に講義をしていただいた際、「Local & Global City」という取り組みについて関心を持ちました。私たちはこの取り組みについてより深く学びたいと考え、地域フィールド演習に参加し、9月10日から12日の3日間、豊岡市を訪問し調査を行いました。

私たちは出石地区、永楽館、城崎国際アートセンター、三木屋、カバンストリート、豊岡市のコウノトリに対する取り組みについて調査を行いました。



では、ここからはそれぞれの調査結果について発表していきます。

盛田 まず、出石地区を訪問し、豊岡市出石市振興局の田口さんにお話を伺いました。豊岡市出石地区は国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されており、出石城下町の歴史的な町並みが魅力的です。そのため、観光ではなく町並みを生かす景観を重視したまちづくりを行っているそうです。また、出石城跡隅櫓の復元で使用された費用2,300万円は全額地域住民の寄附で賄われていたり、出石観光協会にはサラリーマンや医者、建築家といった観光業には直接関係のない職業の住民も会員として参加しているなど、出石のまちづくりに対する地域住民の意識の高さもうかがうことができました。行政だけでなく地域住民も一体となり、まちづくりを行っていることが非常に印象的でした。

その後、私は個人訪問で出石に車で再訪問したのですが、その際気になった点があります。それは駐車場の少なさ、そして道の幅の狭さです。今年年間約100万人が訪れる出石地区は大変にぎわいを見せています。そのため、駐車場が混雑していて、出石に到着してから速やかに車を駐車することができませんでした。また、出石を出るときも町歩きをする観光客をかき分けながら進むため、車で観光は少し不便だと感じました。ただ、先ほど述べたとおり、出石地区は景観を大切にしている町です。車で訪れる観光客のために道幅を広げたり、町なかに駐車場をつくってしまうと、景観を損ねてしまう可能性があります。

この課題に対して、地下に駐車場を設けてはどうかと考えました。ですが、駐車場を整備するのにかかる費用や整備する場所の確保など新たな課題が生じます。何を一番に優先するべきか、まちづくりの難しさを痛感しました。また、自家用車ではなく公共交通機関を利用する方法も考えましたが、アクセスが余りよくないと感じました。しかし、私たちは調べていくうちに但馬地区周辺の観光地をめぐる夢但馬周遊バス「たじまわる」を知りました。「たじまわる」を利用し、一つの観光地コースの中の出石としても観光客を呼び込むことは、とても効率的だと感じました。課題解決のため、「たじまわる」のさらなる情報発信を推奨します。

新谷 続いて、兵庫県の指定重要有形文化財に指定されている近畿最古の芝居小屋、永楽館を訪れ、館長の赤浦さんにお話を伺いました。かつて永楽館は歌舞伎や寄席などが上演され大変栄えたそうです。しかし、テレビの普及や娯楽の多様化により一度閉館されました。その後、町民や開業者の小幡さんの強い思いから、建て直しではなく2年間かけて大改修が行われ復

活に至りました。現在、永楽館は床暖房設置などの整備がされていますが、8割は開業当時、およそ100年前のものなのです。また、永楽館は目先の利益を求めめるだけでなく、地元根深く誇りになるものを目指していると赤浦さんはおっしゃっていました。例えば、チケット販売については、地元に住むお年寄りの方のためにインターネット販売に加えて、直接窓口販売を行っています。さらに、地元客を優先しつつ利益を上げること考え、地域住民のみチケット料金を低額化することも考えているそうです。とても地元に対する意識が高いことがうかがえました。

それだけでなく、永楽館は学校教育の一環として、小学生が狂言を見学する機会を設けたり、地元の人による落語の披露、依頼があればフリーマーケット、結婚式など幅広いジャンルで貸し館をしているそうです。永楽館を中心に地域の人同士がつながるきっかけができていないのではないかと感じました。

最後に、永楽館は公演時や貸し館日以外は舞台裏まで見学に入ることが可能な施設です。利益のために貸し過ぎると、頻繁に観光客が施設内を見学できないなどの問題が起きます。赤浦さんはこのバランスをどうとるのが今後の課題だとおっしゃっていました。

飯田 続いて、KIACこと城崎国際アートセンターを訪問し、館長の田口さんや鳥取大学の教員兼アーティストの木野先生にお話を伺いました。そして、話を伺う中で印象的だったことを3つあげていきます。

①アーティストが集まる理由

- ・滞在型の創作活動拠点 **珍しい!**
- ・ホール、スタジオ、宿泊施設で構成
- 24時間無料で使用可能
- ・城崎温泉街など周辺環境の整備
- ・滞在制作、公演制作業務、ワークショップ、試演会
- アートと地域を結びつける



1つ目は、世界中からアーティストが集まる理由です。城崎アートセンターは演劇、ダンスといったパフォーマンス・アーツに特化した滞在型の創作活動拠点となっています。これは、全国的にもかなり珍しいです。ホール・スタジオ・宿泊施設で構成されており、24時間無料で使用できます。また、城崎温泉が近くにあり、疲れを癒やす温泉や伝統的な町並みがアーティストとしての感覚を途切れさせることなくリフレッシュできるのだそうです。こちらは温泉寺からの景色です。温泉寺は城崎アートセンターから徒歩2分、そこからロープウエーで上がったところにあります。実際

にロープウエーを使い山頂から望む豊岡市内の景色は、とてもきれいですがすがしい気持ちになりました。そして、城崎アートセンターでは、滞在制作や公演制作の業務、ワークショップや試演会といったアートと地域を結びつける活動を行っています。

2つ目は、目先の利益を追求しない考え方です。これは施設の単体利益を求めるのではなく、アートのつながりによって人を呼び込み、町を活性化するというものです。城崎アートセンターのことは徐々にSNSや口コミで国内外に発信され、城崎がアートの町として知られるようになりました。結果として、アートに携わりたい人が世界中から集まり、活動をすることで城崎温泉のPR、さらに大学創設などにもつながっています。この大学というのは、国際観光専門職大学というもので、2021年に開学を目指しており、観光、アートマネジメント、パフォーマンス・アーツなどを主に学ぶ県立大学となっています。そして、こうした動きは人口減少のブレーキの役割を持つことも期待されています。近年、城崎は、外国人観光客は増加傾向にありますが、城崎の人口は年々減少しています。大学が創設されることで将来、城崎で働いてくれる人や観光業に興味のある学生などの関係人口をふやすことにつながります。

3つ目は、アートはみんなのものという理念です。アートにかかわるのに年齢、性別、国籍、障害などとは関係ないという意味で、これはアーティストと呼ばれる人だけがアートにかかわるのではなく、全ての人にとって身近な存在であることをあらわしていると思えました。城崎アートセンター主体で、出石や城崎で地域に密着したさまざまなワークショップを行っています。こうした自由に音楽をつくったり、体を動かす機会があることで、アートを地域の人に受け入れやすくしていると感じました。また、地域の人々がアートを受け入れやすくなることで、さらにアートに関心のある人を呼ぶことにつながっていくのではないかと思います。

盛田 続いては、三木屋についてです。三木屋は創業300年の老舗旅館です。旅館には珍しく図書館が設置されており、宿泊客は自由に利用することができます。ここでは三木屋の若旦那の片岡さんにお話を伺いました。

現在の城崎温泉では、町全体が1軒の宿という考えがあり、温泉を宿の中に囲い込むのではなく、外湯めぐりで城崎温泉を歩いてもらうことを大切にしているという話を伺いました。城崎が温泉の町として栄えているのは、各施設の利益を優先させるのではなく、城崎の町を一番に考える意識があるからだと感じま

した。また、三木屋は明治、昭和の文豪である志賀直哉を初め、多くの文化人が宿泊していた宿として有名です。志賀直哉はけがの養生で城崎を訪れた際、三木屋に宿泊していました。そのときに、志賀直哉の名作「城の崎にて」が誕生したのです。このように、城崎は温泉だけでなく、多くの文化人のゆかりの地です。そんな城崎を文学の町として広めようと活動しているNPO法人があります。それが「本と温泉」です。三木屋の若旦那である片岡さんもその一員です。「本と温泉」は城崎を文学の町として広めるために、作家に城崎を舞台にした本を書きおろしてもらい、それを城崎限定で販売する活動をしています。これまでに、志賀直哉の「城の崎にて」に新たに注釈をつけ加えた限定版や、万城目学の「城崎裁判」、湊かなえの「城崎へ帰る」などが販売されています。こちらの画像はNPO法人「本と温泉」の公式サイトからお借りしてきたものです。水にぬれても大丈夫な紙を使用したり、タオルでつくるなど、入浴しながら楽しむことができるデザインになっています。そして、現在は次回作として、絵本作家ユニットの「tupera tupera」が制作することが決定しています。これらの本はインターネットでは取り扱っておらず、城崎でしか買うことができないため、遠方から足を運ぶ人もふえているそうです。こうして、「本と温泉」の活動は城崎を文学の町として広めるだけでなく、城崎に足を運んでもらうきっかけづくり、城崎の観光業にも貢献しています。

「豊岡靴」の躍進

- ・海外展示会
- ・井原デニムとコラボ
- ・インターネット販売
- ・専門店オープン
- ・靴専用自販機の設置



釜田 次に、私たちはカバンストリートを訪れ、豊岡靴協会事務局長の米田さんにお話を伺いました。

カバンストリートとは、城崎温泉街と出石地区の中間にある商店街です。見づらくて申しわけないのですが、上のほうが城崎温泉で、下の黒い丸のところが出石地区ですが、その中間にある商店街です。ここは豊岡市の中心市街地にもかかわらず、過疎化や店主の高齢化などの影響で空洞化が進んでいました。市の報告によると、老年人口は2020年に約35%に達すると想定されており、全国平均の26%に比べ、大変高いことがわかります。そこで、地場産業であるかばんを中心に

地域の活性化を目指そうと考えたそうです。結果、2009年には「頑張る商店街77選」にも選ばれました。そんなカバンストリートの生い立ちについて紹介します。

当時、豊岡市は全国生産量の80%を占めるほどの大かばん生産地でした。しかし、製造メーカーが他社ブランドの製品を製造するOEMによって、豊岡の名が全国に広まることはできなかつたのです。そこで、ブランド化を通じて、全国での認知度を高め、ひいては製品の売り上げ向上と各企業の競争力を高め、地域経済の活性化につなげることを目的にブランド委員会を発足しました。こうして「豊岡靴」の名で商標登録をし、豊岡市で生産から販売につなげることができるようになったのです。ちなみに、現在も豊岡市は70%の生産量を誇ります。この表をごらんください。織ネームとは商品につけられるタグのことで、この表からわかるように豊岡靴は年々販売数をふやしています。こちらがそのロゴマークです。最近では、海外での展示会や岡山県の井原デニムとのコラボ商品の販売、インターネット販売の開始、さらに今年は東京都丸の内に専門店がオープンされるほど売り出しに力を入れています。また、カバンストリートにはかばんのデザインが施され、実際に1500円でかばんを購入できる自動販売機も設置されています。

また、私たちはカバンストリートにあるかばん職人育成専門学校アルチザンスクールを訪問し、マネージャーの紙谷さんにお話を伺いました。アルチザンスクールは学費が比較的安く、生徒の技術獲得を重視しています。とはいえ、経営を続けるため、後世を担う意欲の高い学生のサポートをどれだけできるか、今後自治体を初め、地域で話し合わなければならないと感じました。

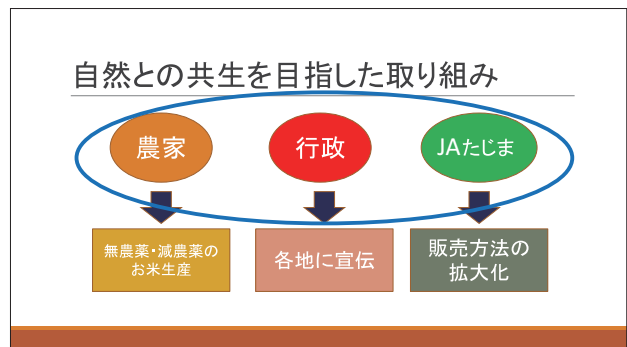
城崎温泉や出石は古き伝統や歴史を守って観光地として売り出していますが、カバンストリートはコラボ商品を生み出すなど新しいことにどんどんチャレンジしていることに気づきました。同じ豊岡市でもまちおこしの方向性の違いに驚くとともに、地域に合ったまちづくりを行うことが大事だと考えました。

小林 続いて、最後に、自然との共生について発表します。

豊岡市はコウノトリの保護・増殖に国内で初めて成功したことから、コウノトリは豊岡市のシンボルとなっています。現在はコウノトリが定着しているものの、今に至るまでにさまざまな取り組みや活動が行われてきました。そんな活動について私たちは、JA農家の暇さん、田結湿地の案ガールズの皆さん、戸島湿地の佐竹さん、JAたじまの塩見さんにそれぞれお話を伺

いました。

皆さんにお話を伺って最も影響が大きかったと言えるのが、こちらの「コウノトリ育むお米」の生産です。このお米はコウノトリの餌となる昆虫をふやし、野生復帰したコウノトリにとって暮らしやすい環境をつくるため、無農薬・減農薬を行い栽培された豊岡ブランドのお米です。それでは、生産するに至った経緯を少し御紹介したいと思います。



現在、コウノトリは特別天然記念物に指定されており、国内で見かけることはほとんどありません。ですが、少し前まではコウノトリが日本の水田にとまっていることはありふれた光景でした。しかし、戦後の圃場整備や河川改良によって生き物が激減したり、農薬の使用によってコウノトリの体は徐々にむしばまれていきました。そのため、兵庫県は人工巣塔の設置やコウノトリの保護施設を市内に設けることで人工飼育を開始しました。そんな人工飼育を行う中、日本国内の野外コウノトリは農薬を含んだ昆虫を体内に取り入れたことで絶滅してしまいます。そのため、コウノトリの野生復帰を目指した兵庫県は、ロシアから野生の幼鳥を受贈しました。そして、幼鳥の人工飼育に取り組んでいる間に、豊岡にある勇気を与える出来事が起きます。それは「ハチゴロウ」の飛来です。「ハチゴロウ」は中国から日本の豊岡に飛来してきたとされるコウノトリで、8月5日に飛来してきたことから「ハチゴロウ」と名づけられたそうです。かつて、農薬であふれていた豊岡市はコウノトリにとって、私たちにとって安全で安心なまちづくりに近づいていると確信を持たせられた大きな出来事でした。「ハチゴロウ」は現在は亡くなってしまいましたが、勇気づけられた豊岡市は乾田となるはずだった水田を新たな湿地とし、コウノトリとともに生きることのできるまち、豊岡へと近づくことができました。農薬の使用は直接人間やコウノトリに害を及ぼすわけではありません。害虫の駆除や殺菌作用がありますが、それは自然の生態系に手を加えることになるのです。実際に、農薬の影響で豊岡の川を泳ぐ魚がいなくなる光景を目にしたJ

A農家の畷さんは、農薬の恐ろしさを思い知ったそうです。

コウノトリの保護、増殖、野生復帰を豊岡市は目指すことで、市全体の意識が高まり、現在は農家、行政、JAたじまが一体となってコウノトリを守る取り組みを役割分担し行っています。主に農家は無農薬・減農薬のお米の生産、行政は各地に宣伝、JAは「コウノトリ育むお米」の販売とそれぞれの活動を行っており、現在は海外への販売や安全を考える子育て世代をターゲットに「ひよこクラブ」での広告や、高島屋などに宣伝の幅を広げ、国内消費量の増加も目指しています。こうして、それぞれに役割が課せられていますが、この3つはお互いの意見に応えられるよう協力しながら活動を行っております。

現在の課題は、まず豊岡市内の小・中学校で設けられているコウノトリの野生復帰やコウノトリを通して環境経済を学ぶカリキュラムに関してです。豊岡ならではの学習内容ではあるものの、ほかの地域で行われている平和学習や人権学習などの時間が設けられず、本来学ぶべきことに時間につくれないという問題が発生しています。そのほかに、生産者の後継者不足や「コウノトリ育むお米」の国内消費量の向上も上げられます。私たちがまず行える解決策は、お米を積極的に食べることです。一見、単純なことに聞こえますが、消費量をふやすことで経済や農業の発展、環境にとっても好影響を与えることなのです。

なぜ豊岡はこれほどの取り組みを実践へとつなげることができたのでしょうか。それは、地域全体の協力体制がしっかりしており、まちぐるみで活動を行いつつ、経済にも貢献しているからではないでしょうか。地元にも昔からある出石の建築物や城崎の文学などを守りつつ、かばんやアート、「コウノトリ育むお米」を通して、海外との交流ができる、まさしく「Local & Global City」が実現していると言えるのではないのでしょうか。本来持っているその地域の伝統や特性を守りつつ、新たなことにも挑戦することが大切だと気づかされました。

最後に、地域フィールド演習を通して、私たちは豊岡を訪れ、さまざまな人に触れることができました。その中で豊岡の皆さんが具体的な目標、プランに向けて前進している姿を見ることができました。まちづくりに対して、行政だけでなく住民の方が真摯に取り組んでいるからこそ実際に活動へとつなげることができたのではないのでしょうか。また、豊岡の住民の方や「Local & Global City」に携わる方々にお話を伺って、とても生き生きと話してくださったのが印象的でした。活気あふれるまちづくりの秘訣は、そこに住む人

の思いが強く反映されるのだと肌で感じることができました。

こちらが参考・引用文献です。御清聴ありがとうございました。（拍手）

竹内 時間が押しているのですが、少しだけ補足と簡単な事実確認の質疑だけ受けたいと思います。

まず、補足ですが、今発表してもらったのは、9月10日から12日にかけてのフィールドワークを中心にしつつ、その事前に勉強会を少しやったり、合宿に行った後に必ず各自でもう一回自分の足で現場に向かうようにという課題を出して行ってもらいました。その後、事後学習会ということで、また集まって研修を行った議論を踏まえた発表になっておりました。

合宿のときのフィールドワークは教員のほうでヒアリング先などを調整したのですが、その後の各自のフィールドワークは各自で予定を立てて行きました。

そのほか何か、これは確認しておきたいということはありませんでしょうか。大丈夫ですか。そうしましたら、後半のディスカッションのときにまた質問等をしていただければと思います。ありがとうございました。

司会 ありがとうございました。これでパネル発表のほう、終わりいたします。それでは、10分間の休憩いたします。

IV. 総括セッション

司会 これより、総括セッションを行います。ここから先の総括セッションの進行につきましては、地域学研究会副会長の家中教授が担当いたします。それでは、よろしくお願いいたします。

家中 では、第2部の後半に移りたいと思います。先ほどご報告があって、僕もすごく感動しているのですが、皆さんもそうではないかと思えます。後半はこんな形で進めたいと思います。第2部に入ったとき、私が冒頭でご紹介したように、「身近な小さな変化」をテーマに、それぞれ教員がこんな方がいるよ、こんな話があるよと提案していただいたんですね。まず、畑先生、川井田先生、竹内先生のほうから、それぞれなぜこの方に今日のテーマで来てほしいと思ったのか、その思いを伝えていただきたいことと、それからご自身のふだんの教育研究のことも自己紹介を織りまぜながらしていただいて、それと他の報告者のお話も聞いて同じように受けとめたこととお話ください。最初、なぜ来ていただきたいかと思ったことと、ご自身のふだんの教育研究のなかでどう受けとめられたか、学べたかということ。竹内さんは、学生たちと豊岡のフィールドワークをしましたが、学生たちと一緒に歩いたことでの気づいたこととか、触れていただければと思います。

その後、今度は藤田先生、福井さん、あと学生お二人、小林さんと飯田さんに、そういう思いで自分が招かれたのかとか、それからほかの自分以外のゲストの方の報告を聞いて、どんなふう感じられたか感想を述べていただきたいと思えます。その後、フロアの方と語りしたいと思います。ご質問を受けたり、感想の伝え合いなどしたいと思いますので、そういう形で進めさせていただきます。では、最初に畑先生の方からお願いいたします。

畑 改めまして、地域学部の、畑千鶴乃と申します。座ったままで失礼いたします。



まず本日、午前中からの内山先生の「ここに生きる一いのちの場所を求めて」をお聞きすることができまして、その時代に何を考えたらいいか、何を考えなければならないのか、どのように行動するのか、現状の中で考えること、そんな御示唆をいただきました。そして、どのような環境をつくるのが自由な人間をつくっていくのだろうかとも合わせて考えてみたいと、改めて私自身も思いました。

そこで、この場で藤田先生のご実践をもとに、家庭的保育をこの地域で立ち上げてこられた藤田先生にご実践から学べること、もっと根本的に立ち返ってみたいことができればなど、そんなふうに思っています。

まず、藤田先生のご実践のご報告の中にもありましたように、定員5人以下で3歳未満の子どもたちの保育を行う場、ゆりかご保育園を立ち上げられたわけです。おうちを保育ができるように改装されまして、今年の2月に開園を迎えられました。奥様が保育士の資格を持っておられまして、藤田先生と娘さんが子育て支援員の研修をお受けになられて、そして、ゆりかご保育園での保育に今、当たっておられます。

藤田先生が本学を御退官されてお会いすることができました場というのは、やはりお話にありました、子育て支援員の研修を御家族で受けておられたということです。まず、本学に、塩野谷齊先生という保育学の大家がおられるのですけれども、その塩野谷先生がご担当される基礎講座があるんです。その基礎講座がありまして、それを受けていただいたその後、畑がそれを受ける形で実践講座、地域型保育という、そういう名前の研修の場ですけれども、要は地域の中での小さな保育のつくり方、そんな講座を畑が引き受けて担当しております。基礎講座を藤田先生が受講されているということを塩野谷先生からお聞きしまして、その後、それを受けて私の回は本当に保育の実践講座ですので、まさに小さな保育をこの地域でどうやってつくっていくのか、深めるという、そういう研修内容です。私自身はどうしてもその場で受講者の方々に深めていただきたい、考えていただきたいと思っております。発達段階に即した子どもとのかかわりの中で特にかみつきについてどう考えていくのか、そのときにどう保育者は対応していくのか、そんなワークショップの時間を必ず持つようにしていますが、そのことを藤田先生にお願いしてもいいのだろうかということも思いました。正直戸惑いました。保育のリアリティを藤田先生と考えるそんな幸せな機会はないけれども、でもそんなささいな保育のエピソードを積み重ねるようなワークショッ

ブを藤田先生にお願いしてもいいのだろうか、そんな戸惑いが私の中にありました。ですけれども一方で、小さな保育のつくり方、地域の中での小さな保育のつくり方講座に藤田先生がご関心を持ってくださっている、そのこと自体がとても私自身はうれしかったです。ですので、子育て支援員の研修内容ももちろん予定どおり、内容を変えずに行うことにいたしました。ですけれども、その段階ではまさか藤田先生御自身が保育を立ち上げられるとは、そのときは思ってもおりませんでした。

その後、2018年、年が明けてから鳥取市内の保育関係の方々からお聞きする機会があって、藤田先生が園長になられて、家庭的保育を立ち上げられた、そんなことをお聞きしました。しかも単なる地域の中での小さな保育ではなくて、家庭的保育です。家庭的保育事業といいますのは、何といたしても、おうちを地域に向けて開放して保育をしていく、これが特徴です。これはすぐに、先生にお話をお聞きするしかない、そしてもしよろしければ地域学研究会にお越しいただいて、ぜひお話をお聞きできたら、そこから私たちが学べることは何だろうか、考えることができたなら、そんなふうにした次第です。

今、定員5人のゆりかご保育園、子どもたちが元気いっぱいに通っています。ゆりかご保育園のご実践を思いますと、何といたしても保育者の方とそれから子どもの関係性が実に濃密であるということです。つまり、ゆりかご保育園の子どもたちというよりは、そこに通っているその子、その子との関係をつくり出そうとしている。その子たち、クラスの子たちではなくて、その子、その子との関係をじっくりかかわりながら時間をかけながらつくり出そうとしている、そんなことを思います。親とは違う保育者となる大人がその子との関係をまずじっくりつくり出して、その関係性を軸にしてといたしますか、ばねにして子どもと子どもの関係に広げていく、そして子ども同士と大人同士の関係に



広げていく、そんなゆりかご保育園という一つの信頼関係を軸としたコミュニティをつくり出そうとする保育がそこにあるのではないかな。私自身は藤田先生の本日のお話をお聞きして、また、ゆりかご保育園に何度か訪問させていただきまして、それを学びました。

本日午前中お聞きした、内山先生のお話の中でも私自身はそれを強く思った次第です。また、人口が減っていく中で地域の中での子どもの育ちを持続可能なものにしていく、そんなふう考えたときに大きな規模の保育の場を一箇所にぼつんと、そして、どおんとつくる、そんなことを改めて地域学部の中から聞きたいと私自身は思っています。

広域から、本当に広い地域から子どもが一箇所に集められて、子どもが暮らす地域から切り離されて、その子は昼間そこで過ごす。また夕方に自宅に戻っていく。自宅がある地域には自分の昼間の居場所がない、この現状を何とか変えていくことができないだろうか、それそのものを改めて聞きたいと思っています。よし悪しではなくて、まず議論をつくる、そこから始めていければなど、そして事をつくる、地域の中でその子が暮らす保育の場をつくる。そんなことを少しずつ進めていければと改めて藤田先生の御実践から私自身は学んだことです。まずは以上です。

家中 どうもありがとうございます。僕らは幹事会ということで企画を練っていたのですが、畑先生のぜひ藤田先生をお呼びしようという、あふれるばかりの思いに僕らは染まってしまっていて、今回のテーマはこれでいこうというふうになりました。しかも畑先生がおっしゃっていたのは、財政学の御専門にして、その研究教育とどうつながるのだろうかという思いがあったのですが、でも考えてみれば財政ということも数字だけの話ではなくて、今、畑先生がおっしゃったような生活や地域をどう支えていくか、それを退職されてから、しかも御家族と地域の中に生み出そう、つくり出そうという、そこに僕らは大変感動したという、学びたいと思って来ていただきました。畑先生もありがとうございます。

次に、川井田先生から、あまり先生呼びはやめましょうか、川井田さんから福井さんをなぜお呼びしようかと、あと、御自身の教育研究とも絡めて、学んだこととか自分のなさっていることに落とし込んでいきたいのか、僕も本当に川井田さんから聞いて感動しまして、福井さんのこと、ぜひご紹介ください。

川井田 改めて川井田と申します。よろしくお願いいたします。

私は去年の4月に鳥取大学へ着任したばかりです。地域学部では2年生の必修科目として地域調査プロジェクトがあります。これは一年間を通じて調査の手法を学んだり、いろいろな地域課題を自分たちで見つける授業でして、着任早々に担当を仰せつかりました。担当教員は数人いまして、それぞれ自分のやりたいテーマを掲げて、やってみたいと思った学生が集まってくる、つまりこの指とまれの方式で実施しています。私がまちづくりについてやりますと言ったところ13人の学生が集まってくれました。

具体的に何をしたかという、私自身も大阪から来たばかりで鳥取のことはよくわからなかったので、まず鳥取の魅力を調べたいと思いました。なおかつ、学生がいろいろな人に会って刺激を受けてほしい、そういう機会にもしたいなと思ったので、まずは鳥取に魅力を感じて移住されてきた人にインタビューしようということを提案しました。そして、学生が自分たちで調べて会いたい人をリストアップして、インタビュー依頼のお手紙を書くところから始めて、13人の学生が合計で9人の移住者の方々にインタビューをしました。その9人の中に福井さんがおられたんです。福井さんのところへは、私は同行せずに学生たち3人だけで行ってもらいました。すると、すごくいい話を聞いたと感動して帰ってきました、どんなことを聞いてきたのと尋ねると、先ほどおっしゃったようなことももちろんですが、それ以外に私が印象に残っている言葉があります。福井さんが学生たちに話した中に、鳥取県は当時人口約57万人だったので、「鳥取県は57万個のギアでできている」と、歯車という少しイメージが悪いかもしれませんが、とにかく全員がいろんな形で組み合わさっていてお互いに影響し合いながら動いて、それで1つの社会をつくっているんだということをおっしゃったと。それを学生から聞いて、私もお会いしたいなと思ったので、福井さんが倉吉で実施されているイベントにお邪魔して実際にお話を聞いたりしま



した。

そのときに感じたのは、福井さんは御自身でいろいろ活動をするだけではなくて、さっきの話にもあったように、移住されて来られた方々も活躍できるような後押しというのか、いろいろな活動ができる場所や仕組みをつくることにすごく情熱を注いでおられるということを感じたんです。

それで、私は地域学研究会というものの幹事も仰せつかってまして、今日のこの研究大会の企画を話し合っていたとき、真っ先に福井さんのお顔が浮かんできて、ぜひ来ていただきたいと提案して今日の日を迎えることができたわけです。

今日のお話で最後の方におっしゃいましたけれども、やっぱり自分事だけではなくて自分たち事にしていく、いかに周りとの環境をつくっていくかということが大切だと、それは午前中に内山さんがおっしゃったお話ともすごく関連することで、私としては自画自賛のようですが、理論と実践が結びついたのでないかなと思っています。

家中 どうもありがとうございました。まさしく、理論と実践、教育と研究、実践が結びついて、何か地域学部の教員はお得だなと、学生がいいもの見つけてきてくれる、それから学ばせていただくという感じですね。では、竹内さん、よろしく願いいたします。

竹内 改めまして、竹内です。今、川井田先生がおっしゃってくれた中にも出てきたのですが、地域学部は2年生で「地域調査プロジェクト」という、地域の調査を手法から学ぶという機会があって、それも目玉なのですけれども、新しいカリキュラムの中では、「地域フィールド演習」という名前前で1年生のときから現場の地域に出ていく授業が単位化されました。

実は、昨年度まで島根県の隠岐島の海士町に地域フィールド演習という形、あるいは単位化以前からお世話になって行っている授業がありまして、私も川井田さんと同じ昨年4月に着任したのですが、着任早々「こういうのがあっても、どう？」という話がありまして、私も海士町に行くことになって、地域フィールド演習を体験してきました。そこで、学生と一緒にいろんな人の話を聞いたりして、私自身も、とても勉強になったのですが、そこで出会った人たちに影響を受けて、学生たちが変わっていく姿を見ました。地域で実践をしている方々なので、すごく熱量があるんですね。そういった方々の話を聞くことができたのが、とても印象的でした。今年度、実は海士町のプロジェクトというのが、町長が勇退されるということ等々のいろんな変わり目だったので、これを機に新た

なフィールドということで、学部内でいろいろ検討したところ、割と近くの豊岡市というところでとても魅力的な活動をしていると。その中の一つに発表の中でもあった城崎アートセンターがあります。私は文化政策を専門にしているのですが、その分野ではかなり知られている先進的な取り組みということで、私もこの鳥取に、山陰に着任したからには近々行きたいなというような話も多分、家中先生とかにしたことがあったのかもしれませんが、そういう御縁があって、豊岡へのフィールド演習を私が担当をさせていただくことになりました。

やはり、先ほどの川井田さんの地域調査プロジェクトと同じように、このフィールド演習で重視しようと思ったものの一つは、やはり人に会って人に話を聞く、現場に行って具体的な話を聞くというところでした。

これも私ごとになりますが、もともと私は茨城県庁で働いていた、実務経験者で、そこから転職してきたのですが、政策という現場、役所も現場なんですよ。いろいろ生々しいやりとりがあったり、もちろん役所の向こうには地域というものがあるわけで、そういうものを、この講義室の中で豊岡市長が6月20日に来られて話をされました。とても魅力的な、中貝市長自身がカリスマ性のある語り口で豊岡市のビジョンについて、熱く語ってくださって、それ自体がとても勉強になったのですが、さて、その実態はどうなのだろうみたいところを、やはり学生に見てもらわなければこれは伝わらないのではないかとこの強弱を感じました。実は中貝市長のお話が終わった後に私は半分冗談で、ではこの中貝市長が言っていたようなことは本当なのか、皆さん一緒に見に行きませんかということ呼びかけました。半分冗談でしたが、半分本気で、私も豊岡は行ったことがなかったので、実際にどういう人たちがどういうふうに行き実践されているのか見に行きたいという思いでした。もちろん、城崎アートセンターのこともそうですが、城崎アートセ



ンターという先進的な取り組みが生まれてきた、その土壌というのはどういうことなのだろうというのを知りたかったというのが私自身の動機でもあり、学生と一緒に見に行きたかったことです。

それが、これまた行ってよかったことですが、私一人で行ったわけではなくて、何名かの教員、そのうちの一人はあそこにいる大元さんですが、大元さんはもともと豊岡のコウノトリの、今日も発表の中にあつた自然との共生の部分での研究をフィールドとしてされているという先生と一緒に行くことができました。あとは、家中先生や同じアートのことをやっている五島先生と一緒に連れて、さらにもう一つ大きかったのは城崎アートセンターでうちの木野先生、ダンサーでこの大学の教員でもいらっしゃる木野先生がレジデントアーティストとして、そこで作品づくりをやるという幸運に恵まれ、そういうチャンスもあったということで、そういう教員同士でいろんな視点で豊岡を見ることができました。

それぞれの教員がそうやって興味を持って見ているという姿も学生に見てほしいなという思いがあって、実際行ったら私や五島先生が、学生を制して学生より先に質問してしまうという場面もたくさんあったりしたのですが、そういう現場感みたいなものを見てもらいたいということで、それが今日の発表でどうだったかという、表面的な聞いてきた話とかというものもたくさんあったのですけれども、最後の最後でやはり住民の方の思いといいますか、そういったものがベースになっているんだというような報告があったのは、私の狙いの一つは少し達成できたのかなと思いつつも、まだまだ課題というか、もっと勉強というか見てほしいこともあるなというのはありますが、今後また、事後勉強会だったり、先ほど言い忘れましたが、今年度中に現地での報告会も行いたいなと思っていますので、それに向けてまた深めたいと思っています。ちょっと長くなってすみません。

家中 ありがとうございます。豊岡市は、市長が来てくださったんですが、また、それを受けて僕らが豊岡市にこのプロジェクトといいますか、事業を持っていったときに豊岡市の職員の方がかなり積極的に勢ぞろいでいろんな対応をしてくれました。そのこともまた後のフロアとのやりとりの中で話題にしたいと思います。

では、今度は2巡目というか、藤田先生、福井さん、それから小林さん、飯田さんに、まずこんなことで自分が呼ばれたんだ、そうだったんだという、畑さんの言葉に対応することと、あと、福井さん、それから学

生の報告について気づいたことがあれば、またお話しください。福井さんも同様に川井田さんのほうにリプライというか、まだまだ奥は深いんだぞでもいいですが、あとほかの取り組み、それから学生の2人は今日の発表への感想、あと気づいたことを言ってくれればと思います。ではお願いいたします。

藤田 畑先生、先ほどは紹介どうもありがとうございました。実は、畑先生からこの地域学研究大会で報告をしてほしいと依頼された時には、まだ保育園を開園したばかりで、3人しか子どもを預かっていなかったのです。今は園には5人の子どもたちがいますが、この家庭的保育は規則で最大預かって5人までと決まっています。それ以上は預かれないのです。だから、この小さな保育園の経験をお話しても、どれだけ意味があるか自信がありませんでした。

そのために、報告させてもらってもいいのかどうか迷っていると、畑先生が「小さいからこそ、できることがあります。今回の研究会のテーマは、それなのです。小さな保育園だからこそできること、それを発表してもらえればいいのです」とおっしゃいました。その言葉に背中を押されて、では発表させていただこうと私の決心がつかしました。

保育園を開園して、まだ1年しか経っていませんが、大きな保育園ではできないが、「小さな保育園だからこそできる」という観点から、この1年を振り返ると、報告で述べましたような、いろいろなことができました。そして、これらは保育をするにあたって非常に大切なことではないかと思うようになりました。

大きな保育園では、メリットもありますが、大きいゆえに実施しようと思ってもできないことが、私の保育園ではできることに、少々自信も持つことができました。そのことを、先ほどの報告で述べさせていただきました。

これらの経験を通して、私の考えも変化しました。「大きい」と「小さい」は相対的なものにすぎません。小さい、大きい、と感じることの感覚も変わってきました。

たとえば、小さい夢、大きい夢とか言いますが、その人にとって本当にそれが自分のなりたいことであれば、これを他人が小さい夢とか大きい夢とか言うことは間違っている。それは、確かにその人にとっては大きな夢なのだとして評価する必要があると思います。そのような見方も、今日の報告を準備するなかで感じることができ、非常に有益でした。

外見的には小さくても、小石を池に落とせば、その波紋が大きく広がっていくように、あるべき保育の発展の可能を示せるような報告になればという思いを

込めてお話をさせていただきました。同時に、小さな保育園のメリットを生かすために、今後さらに何ができるのかを考える良い機会になりました。皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

家中 ありがとうございます。では、福井さん、お願いいたします。

福井 今日は、こういう場に招いていただきありがとうございます。本当に皆様のお一人お一人の一言一言を勉強させていただいております。ありがとうございます。

川井田先生が話された57万個のギアという話は確かにしました。根底にあるのは「大家族計画」というもので、それは多くの子どもをつくろうという話ではなくて、血のつながりはないけれども家族のように支え合ったり、心配したり、喜びがあったら分かち合えるような社会を目指していこうというものなんです。たとえば鳥取丸という船があるとすれば、皆さんは乗組員で何かしらの役割をもった必要な人なんです。船の漕ぎ手もいれば交代する人もいる、おなかがすくので給食をつくる人もいるし教育をする人もいるというように全員に役割があると思うのです。他にも、お金がある人はどんどんお金を出してほしい、どんどん回す。1万円というのはたった23円ですからね、印刷代と紙代で23円。100万円あっても2,300円。1,000万あっても2万3,000円です。でも使えば100万だったり1,000万だったりするわけです。何もたんすの中に入れておく必要はないわけです。内部留保で会社に置いていって、しょうがないんですよ。将来はどうなるかわからないんだから。どんどん地域で回しましょうという話です。お金がある人はお金をどんどん出して地域で回してください。

じゃ、お金はないという人はどうするか、今まであなたがやってきたスキルとか知恵、アイデアを出してください。それもないという人はどうするかというと、時間とあなたの労力を貸してください。それもないよという人は、伝えてください。伝えることだったらできるかもしれないですよ。ということは、誰でも何かの社会貢献ができるよという話です。

では、それが57万個のギアとして、一つの大きな船に乗っているとすれば、どこに向かっているのか。嵐もあるし、台風も来るし、ときどきは休憩も必要ですね。向かっているのは未来、時計を動かしているギアだと思えばいい。だから全員が必要なんです。だから自殺しちゃいけない、いじめちゃいけない、必要だから。そういうことを何らかの活動で表せないかなと考えて、実験しながらやっています。カーゴマルシェもそうです、細々とですが続けていきます。

家中 ありがとうございます。福井さんのお話を聞いていると、とても元気、楽しくなって一緒にやりたいなという気持ちになりますね。それからさっき、川井田さんが移住した方たちの活動する場をつくるということをおっしゃったけれども、福井さんのお話の中でも、今もおっしゃいました、その人はいろんなスキルを持っているので、それをうまく引き出して、君だったらここができるよ、あれができるよと自分の経験を生かすような場があるのだろうなと思って、藤田先生もそうですね、奥さんの保育士の夢に終わらせずに使うことができたというのも、まさしくそうかなと思って、御自身のおうちの改造もそうですね、持っているものをもう一回使いこなしていくということだろうと思います。

では、小林さんと飯田さん、お願いします。

小林 地域学部、地域学科、地域創造コースの小林と申します。本日はありがとうございました。全体の感想を言わせていただきます。

まず、内山節先生のお話を伺って、一番すごく印象的だったことが、最後のほうにおっしゃっていたんですが、やり方が新しくても本来のものに回帰しているという言葉がすごく印象的で、実際に私たちも豊岡を訪問させていただいているいろいろな場面を見せていただいたり、お話を聞いたりしたのですが、例えば出石地区であったら、出石地区は昔からある城下町の町並みを守りながら地域の住民の方々とお互いに支え合って、新しいものも入れつつ、それでも本来のものを守っているということとか、もしくは城崎であったら、文学があってさらにその文学にあやかって、本を出版して現地限定で販売して、足を踏み入れてもらうといったように、やり方が新しくても本来のものに回帰しているというのは、まちづくりにおいてすごく大事なことで、まちづくりだけではないかもしれないですが、でも地域を再生させるというのには、非常な重要なことなのかなというふうに思ってたんですけども印象的でした。ありがとうございました。

福井さんのお話を伺って、まちづくりは人づくりの次に事づくりをまず始めようというのも印象的で、やっぱり実践しないことには何も始まらないと思いますし、この言葉は何でもない言葉に聞こえるかもしれないですが、でも、すごく力を持っている言葉で、今後の私たちであったり若い人にとって重要な言葉なのではないかなと思って、ぜひ、今日直接お話を伺うことができたので、私自身からもっと友人であったり、周りにも拡散していけたらいいなと思っております。ありがとうございました。

飯田 地域学部、地域創造コースの飯田菜生です。今回、豊岡のフィールドワークに参加して、さまざまなところで多くの方からお話を伺うことができて、一番に思ったのが、やっぱり一番に地域のことを考えているというのを強く感じました。

まず、内山さんのお話を聞いていく中で特に印象的だったことが、自由な個人はすぐれた関係をつくり出すものという言葉が印象的で、田舎であったり、地域で暮らしていると、人間関係などで自由ではないように、今まで感じていたのですけれども、すぐれた人間関係というのは、逆に一人一人を自由なものにするんだなということを思って、私が今までにない考え方だと思ったので、とても印象的でした。

また、福井さんのお話の中で、地域の中に資源があるだけでは町は変わらないという言葉も印象的で、そういう資源を活用しなければ、町の魅力というのは伝わらないし、そういう魅力があることで、魅力を周りに伝えることで、その地域の人たちは自分たちが暮らしている地域にプラスな意識を持っていくのではないかと思います。

そうした住民一人一人の利害関係とかではなく、互いに思いやる関係を持つことがこれからの地域を考える上で重要になるのではないかと思います。今回は貴重なお話を聞かせてもらえたと思います。ありがとうございました。

家中 ありがとうございました。それでは、次に少し会場の皆さんとやりとりをさせていただきます。今日のゲストの方々への御質問、先ほどちょっと時間がなくて十分にマイクを回せませんでしたので、御感想も含めて結構ですので、どうぞフロアのほうから御発言いただければと思います。では、どうぞ。



会場発言 湯梨浜町から来ました。よろしくお願いたします。今日の地域学研究会が9年目、9回ということですが、今日初めて参加させていただいて、多面的な視点でのそれぞれのパネル者の皆さんの報告を大

変興味深く聞かせていただきました。私、午後からの参加しかできていませんので、午前中はおもっとたくさんいらっしやったのかどうかはわかりませんが、もっともっと多くの地域の方や、いろんな関係者の方々の御参加があって、いろんな交流とこれからにつなげていける何かの機会になっていけばいいのかなということを感じましたので、ぜひもっともっと、この研究会の発信を県内に各団体を含めてしていただけたらなということを感じました。今日の参加は藤田先生のほうからの、ぜひおいでねという御案内がありましたので、私、保育団体のほうの代表をしております、その関係で藤田先生に御質問させていただきたいと思っております。

まずは、3歳未満児の少人数で心細やかな保育環境を整えて、保育提供をされているという実践報告をいただきまして、本当に敬意を表するところです。それで、その上でまず一つは保育の実践をなさっていらっしやるところですが、保育を振り返り、また、新たな子供たちのそれぞれの年齢があるわけですが、成長発達を促していくために、保育の質向上に向けた職員の皆さんの、御家族の方が中心ではありますが、自主研修、または畑先生等の支援員の講座にも出られるということがありますが、自主研修的なものは、こういうものやっぴらっしやるのかなということの一つ。

それと、特に3歳未満児に対しては、離乳食、中期後期、完了食を含めて、食が非常に大事になってきますので、一つは食材に対する基本的な考え方、どう思っぴらっしやるのかということ、献立方法を教えてください。それと、3歳で卒園という形になりますので、連携保育施設を持っぴらっしやるのかどうかという、この点だけ教えてください。

家中 では、藤田先生、お願いいたします。

藤田 ご質問ありがとうございます。まず、保育の質の向上の研修ですが、私は研修の主催者ではなく、むしろ研修を受けるほうなので、私以外の方、たとえば研修の講師をされている畑先生などにお聞きになったほうが良いのではないかと思います。

私の保育園の食事の献立については、離乳食にむかうこの時期の子どもにとって食育が非常に大切であるという観点から、栄養士さんの監修のもと私の保育園で調理師さんに調理をしてもらっています。10時から13時までパートで調理師さんに来てもらって、子どもたち5人分の昼食とデザート、3時のおやつを、それぞれ作っぴらっしやっています。

それから、連携施設についての御質問ですが、私の保育園は3歳未満児を預かっていますので、3歳児にな

ると他の保育園やこども園に行きます。その場合の施設については、近くにある「ひかりこども園」と連携施設の協定を結んでいますので、保護者が望めば、私の保育園を卒業して「ひかりこども園」に入園することができます。

また、保護者の方がこの連携施設を希望されない場合でも、それまで私たちの保育園に通っていた子どもたちは、入園できる条件のポイントが高くなりますので、他の保育園やこども園に入る場合は有利になります。そういう利点があるということです。

会場発言 園の中での自主研修ということについては、

藤田 保育園の自主研修は、鳥取市や鳥取県などが研修プログラムを提供していますので、それを受講することになります。私の保育園からも受講者をだして、受講した者は帰ってきってからその研修の内容を他のスタッフに伝え、保育にかかわっている全員が共有するようにしています。

家中 よろしいですか、畑先生。

畑 鳥取市や鳥取県が主催する研修の仕組みの中に、家庭的保育事業ももちろん入っぴらっしやっていて、その一環で必要な研修に今、参加しておいでのところです。

家中 どうもありがとうございます。それから、私の方からフロアに振ろうかと思いますが、今日、豊岡市役所からも、この地域フィールド演習をお世話してくださった坂本さんがいらっしやるので、別に役所から派遣されたというわけではなく、懇談会のときに内山さんが今日来るよと言っぴらっしやたら、ぜひ来るということやっぴらっしやって、学生の報告への感想もそうですが、今日の取り組みについてのご感想、あるいは、投げかけるものがあっぴらっしやたらコメントをいただければと思います。



会場発言 皆さん、こんにちは。兵庫県豊岡市から来ました坂本と申します。

学生の皆さん、本当にお疲れさまでした。フィール

ド演習のときはお越しになっているのはわかっていたのですが、その後また個人的に豊岡を訪問されたということは知らなかったもので、本当に大変だったなと思って聞いていました。

出石の永楽館だとか、それから城崎国際アートセンターとか、カバンストリートといういろんな取り組みを紹介していただいて、豊岡は、あっ、そんなにすごい町なのかなと自分も思うぐらい、いろんな事例を取り上げていただきました。でも、どれも一つ一つが、今日キーワードになっている、小さなつながりというか、小さいコミュニティの中で深められてきたことで、それらが一つになって全体で輝いているということなのだろうと改めて思いました。

思い出したのは、平成17年に豊岡市は1市5町で合併をして新しい豊岡市になったのですが、そのときに中貝市長が、それぞれの町が真珠のような輝きを持っていて、それをつなげてネックレスにするような町にしたいということをおっしゃっていました。大きい町になって、のぺっと同じ顔になるのではなくて、それぞれの個性が輝くような町になればいいなということをおっしゃっていて、その小さなつながりというのを深めていった結果、今のようなことになっているのだろうと思いました。

私自身は、旧豊岡市ですずっと勤めていまして、どちらかというと、コウノトリ野生復帰の取り組みを一生懸命やってきた一人であります。私は、コウノトリという鳥を見るときにいつも思うのが、「過去と対話をさせてくれる」ということです。豊岡ではもう今、町を歩いていても普通にコウノトリに出会ったりするのですが、そのたびにコウノトリがどういう経過で今に至っているのかなとか、昔はどういうふうに人とつき合ってきたのだろうということを会うたびに思い返します。そのたびに過去と対話をさせてもらっている。我々は今だけを生きているわけではなくて、やっぱりつながってきて今があるので、そういう



ことをたびたび繰り返して思い出しながら、では、これからどうするかということを考える、よいきっかけをコウノトリがつくってくれているというふうに思っています。たぶん城崎もそうだし、出石もそうだし、カバンストリートもそうですが、やっぱりつながってきたことというのを振り返ったりしながら、今できることをやっているということだろうと思います。

「ローカルを極めながらグローバルに」と言うときと大げさな表現ですが、我々とはとにかく足元を磨き続けるみたいなことをやっていきたいなと思っています。では、鳥取では何ができるか、あるいは自分が生まれた町だったらどうできるかということ、深く展開していただけたらうれしいなと思います。豊岡での発表会、またお待ちしております。よろしくお祈りします。

家中 どうもありがとうございます。竹内さん、何かよろしいですか。

竹内 すみません、今聞いて思ったことなんですが、豊岡市の基本構想で今日の発表のテーマにも出てきた、小さな世界都市で英語に訳して、「Local & Global City」という言い方で、小さなというのをローカルと訳したりという、この感覚がすごくいいなというところであり、今回のこの研究大会のテーマともつながり、畑先生が持ってきてくださった「身近な小さな変化」ということと、すごく結びついているなど。あと、内山さんがおっしゃった過去との対話みたいなこと、自然も地域のメンバーであるみたいな日本人的な考え方というのもの、通じるものがあるのかなと、すてきなコメントをありがとうございます。

家中 どうもありがとうございます。では、手を挙げていますので、マイクをお願いします。

会場発言 地域教育学科3回生の学生です。講演をありがとうございました。福井さんに御質問があるので、先ほどみんなが動いてほしいとおっしゃっていますが、できない人はできることをするとおっしゃられたのですが、何か僕はそれがちょっと人を資本として見ているような気がしました。なぜなら、それすらできない方々もおられると私は考えていまして、たとえば生まれたときから意識がない方々もおられます。そういう方々はどうしたらいいのかなという質問です。よろしくお祈りします。

福井 ありがとうございます。大家族計画というのは、寝たきりの人にも当然当てはまります。僕の弟は実は知的障害者です。でも彼は彼でやることのあるんです。だから、公平に公正にというのはもちろん当たり前、家族ですから。でも、ほかの人から見れば家族ではない。僕が言いたいのは健常者を中心にしたという話

ではなくて、そういう気持ちをまず持たないと社会は変わっていかないということです。持ちましょうよと、努力する必要はないです。日々の活動の中で一人ひとりが気づいて、その人が伝えていくような仕組みがあったり、さらにそれを持続可能にすることで、それが可能になっていくのではないかなと。世界は変えられないですよ、一人では。でも何かしら自分がアクションを起こすことで、それが拡散したり気づきを与えたりして、結果的に変わっていくのではないかということに希望を持ちたいですね。だから、あくまでも健全者を中心にした考えではないです。僕もそういう弟がいて、彼も必要な存在だという視点で話をしたつもりなんですけど、伝わらなかったらごめんなさい。

家中 どうもありがとうございました。ほかに、はい、どうぞ。

会場発言 先ほど質問された方が意識がない状態でもおっしゃっていて、たぶん私の想像なんですけど、福井さんがおっしゃりたかったのは、内山さんが「かけがえのない存在」とおっしゃった言葉で捉えればつながるのかなと思いました。その人が存在することで、もちろん大変なこともあるけれど、そこに情熱を注ぐことや、とてもかけがえのない存在であるということも、私たちにいろいろなことを与えてくれるのかなと感じたんです。

家中 どうもありがとうございました。なるべく皆さんに御発言いただくと思うので、ではどうぞ。

会場発言 今、お聞きしまして、大変いい話だなと思いました。それで、今、私たちはフェイスブックなり、いろんな情報ツールを持って、こういう会があるということは知っているのですが、一般の方というのは、あまりご存知ない方が多いんですよ。ですから、例えば出張というような形で、あるいは青谷総合支所ですとか、あるいは公民館ですとかというような形をとっていただければ、もっと地域民に対する広報が広がるのではなからうかなと。

もう一点は、私は昔から思っていたのですが、日本人の原点に戻ってきているのではないかなと。自然エネルギーにしても、いろんなことにつきましても、昔の人は自分たちの手でやっていたんですよ。例えば道路をつくるにしても、田んぼを耕してつくるにしても、地域の人がみんなで協力し合って、そして道をつくっていったと。それから、自然エネルギーにしても山に登ったり木を切ってきたりして、そうして日本人のよさというのをだんだん失ってきている、それをもう一回原点に帰ろうかなと、不易流行ではないですが、そういった時代の懐古ではないですけども、そ

ういう形に帰ってきているのではないかなと。ただ、それらを皆様方があまり理解していないという、特に地域の方なんかもそうなんですけど、そういうことをもう一回思い起こさせるためにも、ぜひ地域のほうでも出張講義とか、そういうのをさせていただきたいと思っております。今日は大変ありがとうございました。
家中 どうもありがとうございました。ほかに、いかがでしょうか。

会場発言 僕の質問に対する答えをありがとうございました。その上でなのですが、かけがえのない存在というのは僕もすごくわかっていて、かけがえのない存在なのであれば、僕は何もしなくても、存在自体を認めてあげればいいのかと思っています。働くからとか家族だからとかでなく、働かないでも何も持っていないけれども、いるだけで認めてあげるとということにはならないのかなという疑問を持ちました。だから、全然与えてくれなくても、その存在を認めていくべきなのかなと考えました。

福井 お答えになるかどうかはわかりませんが、カーゴマルシェをやっているとき、リヤカーのときもそうなんですけど、御高齢の方になるとやっぱり足腰が悪くて、なかなか外へ出てこれないんですよ。どうしても引きこもりになってしまう。そうすると、情報が伝わらないのと同時に思いがいっぱいになって、どこにもそれを持っていく場がないお年寄りが増えてきています。だから、表に出てきてもらうためにも、「こんにちは、毎度」とか言ってドアを開けると新鮮な空気が入るわけです。それで出てきてもらう、それがまず一番、健康のためにもいい。そうするとそういうお年寄りはずっとしゃべるんですよ。でね、次に行かなきゃいけないと思いつつも聞いてあげる、傾聴する。これはとても大切です。物を買ってもらわなくてもいい、相手が何を求めているかというのは10人いたら10人違う。引きこもっているお年寄りの方のお話を聞いて



あげるだけでも、何かの貢献になっているのかなというふうに思います。答えになってないかな。

家中 ありがとうございます。みんながシェアされていますから大丈夫です。ありがとうございます。

会場発言 失礼します。本当に内山先生のお話から午後の発表まで、素晴らしい時間でよかったですと思います。皆さん言われていますが、この話が全体がつながっていくということが、この会の一本の筋が入っている、世の中のいろんなことがどんどんつながっていくというのは、我々にとって実はわかったという瞬間になるなという、わかるという意味を何か本当に感じさせていただいた会かなというふうに思います。

藤田先生にはいろんなところでお世話になっておりました、ただいつもの藤田節がちょっと社会のことは、政治のことはどうなんだというのは、ちょっとこれが社会とどうつながって今の問題と、今なされていることがどうつながっていくのかということ、もう少し実はお聞きしたかったかなというところはあるのですが、いろんなことがつながって行って、実は物事はわかっていくというそのプロセスを改めて感じさせていただいた、そういう大変ありがたい時間でした。本当にどうもありがとうございました。

家中 どうもありがとうございました。ほかにフロアのほうからいかがでしょうか。では、お願いします。

会場発言 地域学部の准教授の村田といいます。内山先生のお話を聞いていて同時に前半、後半と聞いていて、大変心が温かくなってきたというか、それを少し考えてみるとやっぱり、人間は個人になると自由ではなくなる、逆に言えばすぐれた関係の中で人は自由になると内山先生がおっしゃっていたのですが、あと藤田先生と福井先生のお話を聞いていて、お二人ともやっぱり、今の時代って、僕、2年前に初めて教員になって思ったのですが、先生というのは社会的な親というのですかね、もう一人の親になることなのだなと最近すごく思っていて、お二人がやられていることで大変に、内山先生の表現で言えばすぐれた関係とおっしゃるんですが、お二人とももう一人の親になられている感じがすごくして、こういう関係の中にいたときに人って自由とか次のステップに行けるといえるのか、福井先生の話聞いて何かもうやりたくなっちゃう。うちの子供を保育園に送りたいなと思ってしまう、この感覚って何か、ああ、こういうすぐれた関係って僕の中で、さっき先生がおっしゃいましたけれども、3人の中で共通しているのは社会的な親というのですか、僕の存在を認めてくれる誰かが、しかも、その依存先が大変多くなっていく。そういうことがだんだん少

くなっているように思うんですね。その中で、お二人がされていることが、大変にすぐれている点はそこだなと感じて、僕もちゃんと先生にならなきゃなと思いつつ、今お話を聞かせていただきました。どうもありがとうございます。

家中 どうもありがとうございます。社会的親って、昔は名づけ親とか、僕らが小さいときは、おまえは橋の下から拾われてきたんだぞと、親に怒られると言われてたんですけど、それとか最近、仲人というのがなくなってきましたが、それも親ですよ。本当に社会的親というのがあって、それをそういう言葉は使わないかもしれないけれども、でも福井さんは大家族計画とおっしゃってましたし。

僕なんかはいつも思うのは、少し脱線しますが、親はやっぱ自分の子をいつまでも大切に見ていたいだけども、でも残念ながら親が先立たなくてはいけないですよ。あるいは親がその場にはいないときに自分の子が危機に陥るときもある。そのときに託する人たちが地域、社会、世間にいるということ、そういう思いが制度として立ち上がってきたのは、日本の社会的親の制度かなと思って、慣習ですかね、文化。そういうものを現代にもう一回どうやってつくっていくかというのが、やっぱり関係をつくって一人一人が束縛される関係ではなくて、自由に生きれる、その個性が活かされるものというのをつくれたらと思います。

それでは、内山さん、最後にご感想を言っていただければ、ありがたいのですが。よろしく願いいたします。

内山 地方といってもいいし、田舎といってもいいけれども、そういう地域からいろんな試みがどんどんなくなっていくというのがこの間の歴史で、それが今いろんな試みをまた始めた時代といえますか、ちょうどそういう端境期なのだろうという気がします。そういういろんな試みが蓄積されていくと、いろんなことが



変わっていきます。だから、何がよいかということではなくて、蓄積が大事ということです。今そんなところに来ているような気がします。

最近、日本でつくっているもので、相当品質がいいものができ始めたなと思っているものの中にワインとチーズがあります。ワインはもういろんな地域で結構いいものをつくっていますし、それからチーズも、もともと日本のチーズはちょっとだけないなという感じだったのですが、最近では、おっというチーズがたまにあるといいますか、そのはしりをつくったのに、北海道の新得というところに「共働学舎」というのがあって、ここは主に知的障害者と一緒になって仕事をしているところで、それで「共働」なのですが、そこがつくった、「さくら」というチーズのできがよくて、本当にびっくりという感じですね。共働学舎の方に会ったときにどうやってこんないいチーズをつくったのと、そしたら、いや、簡単な理由で、知的障害者がつくっているからと。健常者はどうしてもいろんなこと考えながらやるので、雑念が入っていかんというのです。知的障害者の人は発酵だけに集中して管理をするといいますか、だから健常者にできないぐらい、その管理がいいという。その結果、できたのがこれというので、ああ、そういうことがあるのかと思って。障害を持っている方は、はっきり言えば、能力はないんだけど、能力がないから社会から追放するのではなくて、健常者が一緒になって働けたり生活できたりするようにしましょうみたいな、そういうような雰囲気だったけれども、逆があるという。障害者の方がすぐれたものができるという、そのケースがあるという、そのことを思って、そうすると多分これはいろんなところで本当はあるといいますか、ただ私たちの社会は健常者中心の社会をつくっちゃっているために、そういう可能性を隠してしまっているといいますか。だからもっと表に出してくると、こんなやり方があったというのが、いっぱいあるはずといいますか、そういう点でもこれからそういう蓄積が必要です。

それから、僕のいる上野村なんかでも、実は遊休農地をつくらせないという方針が村にはあるので、それでも少しは出るわけです。それをお年寄りの人たちにすごく安いパート代みたいなものを出して、農地耕作隊をつくってもらったといいますか、実はそれは健康対策、あと医療費対策でもあるのですが、だから能率を上げてやらなくてもいいと。とにかく出てきて体を動かして、楽しくやってくればそれでいいと。そのかわり、ほんのちょっとお小遣いが入る程度で、そしたら結構皆さんがやって、そのうち、農業を教えてくださいという若者が来たりするものだから、ますます元気

になっちゃったりする。大体皆さんよくできますので、結果的には能率も結構いいんですが、そのうちに本気になってきちゃって、もっといくというので、今はトマトだとかイチゴだとか、結構いろいろつくっていて、その上に今度、土木事業部をつくっちゃっているんです。村のお年寄りっていろんな仕事をしていますから、ちょっとした土木工事はできるんですよ。ちょっとしたコンボぐらい動かせるとかですね。

ですから、自分たちで請けてちょっとした工事、橋をつけ直すことはできないですが、実際には村の中でもちょっとここをコンクリートにしたりとか、たくさんあるといいますか、だからそれをどんどん受けるいう。だから、農業兼土木会社なんかをつくっちゃって、非常に楽しくやっています。

やっぱりこういうのを見ていても、私たちの社会、人間の能力を生かし切っていないなと。それをやったのも、もともとは、冬になったら炬燵に入ってテレビを見ているばかりになっちゃうので、健康にも悪い。ですから、本当に今の社会、いろんな埋もれた能力というのはいっぱいあって、その中には障害を持っているがゆえに持っている能力もあるし、社会がもう顧みないために、埋もれちゃった能力みたいなものがいっぱいあって、そういうものを掘り返していく社会といいますか、つくっていききたいなと思いが話を聞いておりました。ちなみに、今日、僕、こういう鞆を背中にしょってきていますが、これは豊岡です。(拍手)
家中 どうもありがとうございました。では、これで総括セッションのほうを終了させていただきたいと思えます。皆様、ご報告、またディスカッションも、どうもありがとうございました。(拍手)
司会 皆様、本日の大会はいかがでしたでしょうか。これもちまして、本日の内容は全て終わりとなります。皆様、本当にお疲れさまでした。それでは閉会に当たりまして、柳原邦光、地域学部副学部長より閉会の御挨拶を申し上げます。よろしくお願いいたします。



V. 閉会

閉会挨拶

柳原 邦光（鳥取大学地域学部副学部長）

皆様、今日は長い時間ありがとうございました。それから、講演していただいた方、パネルで報告していただいた方、ありがとうございました。学生さんも緊張したと思いますが、ありがとうございました。

最後、特にまとめということはないのですが、少しだけお話をさせていただきます。

この学部は地域学部ですので、教員は「地域」や「地域学」について考えなければならない立場にありますが、地域学という学問自体がしっかり確立されているわけではありません。それで、地域学の授業をするときに、教員みんなであれこれ考えたのですが、私自身はもう素朴に、「今、どうして地域なのか、地域学という言葉で何かをしようとする背景に何があるのか」、そういうところから考えようと思いました。日本だけを視野に入れるのではなくて、今日内山さんがお話しになったような世界の大きな構造といいますか、近代という時代の大きな動きの中で、今は、時代が大きく変わっていく、そういう転換点にあるのではないかと、そうだとすればどういう方向に舵を切っていくか、としているのか、という捉え方ですね。そういう大きなところを視野に入れて、地域を考えるべきではないかと思いました。

「地域学を創る」という場合も、そのような部分が必要ではないかということで、もちろん学術的なものも勉強するのですが、実際に社会で活躍されている、動いておられる方からお話を聞いて、そこから教員が学ばせていただくというスタンスもすごく大事ではないかと思ったのです。

それで、これまで、この大会もそうですが、「地域学入門」と「地域学総説」という授業では、ゲストの方にたくさん来ていただきました。研究者の方もいらっしゃいますが、そうでない方もたくさんお招きしました。ゲストの方のお話から、「この時代に何が重要なのか、どこを目指して物事を考えていけばいいのか、地域に取り組むとしたらどういう観点を見据えて取り組んでいけばいいのか」という問いのヒントを探してきました。

今日の内山さんのタイトルに「ここに生きる、いのち場所」というのがありますが、内山さんの本を含めて、どうも皆さんがおっしゃりたいのは、究極的に言うと、「いのち」ということだろうと思いました。「いのち」というときに何が大事なのかというと、「関係」ということかなと思いました。それで、今回、内山さ

んに来ていただいて、そういう点をすごく重視してられましたので、90分の時間の中でまとまったお話をさせていただいたら、私たちにとってすごく大きな学びになるのではないかと考えました。

それからもう一つ、「私」と「地域学」ということで、近代の学問でいうと、すごく大きな観点から考えるのですが、私自身はもっと素朴に考えていいのではないかと、人がものを考えるというのは、「自分から」考えるわけですから、まさに自分から考えて自分の足元から考えていったほうが、一番物事がわかりやすいのではないかと、特に生活ですよね。自分の生活というところから、自分が生きていくというところから考えていったら、大事な関係ということも捉えやすくなるのではないかと、思うのです。そこで、「いのち」を見据えながら、「関係」を考えていくということで、地域学と言われるもののベースができるのではないかと、考えています。

今年は、地域学入門も地域学総説もほぼ同じタイトルでした。「私」と「地域学」というようなタイトルで、まず原点といいますか、基盤というか、そういうところから考えてみようということで、この大会も同じタイトルにしました。1年の最後に、今回登場していただいた皆さんにお話をうかがって、学ばせていただくということです。

実際、お話をうかがっていて、だんだん気持ちが温かくなると思いますか、楽しくなると思いますか、これはとてもいいことだなと思いました。これからも私たちは学外の皆さんのお話をたくさんうかがいながら、「地域学」を創っていくつもりです。この大会もここに参加している誰もが学び合う場だと思っていますので、そういう大会であり続けたいと思っています。また、来年度以降も継続して開催しますので、皆さんよろしく御参加をお願いします。今日はどうもありがとうございました。（拍手）



地域学研究会第9回大会ポスターセッション

鳥取大学地域学部棟 5160 講義室前スペース等

〈地域学部での研究〉

1	くわいわい淀屋>における地域と連携した学生活動 —倉吉市明倫地区における地域協働教育— 鳥大たのしみまちづくり連・藤井正
2	歴史資料を活かした鳥取市街地の魅力発見プロジェクト 岸本覚
3	地域資源を顕在化させるアートマネジメント人材育成事業 西岡千秋・竹内潔・筒井宏樹・木野彩子
4	移動するゼミによる居候型サテライト・キャンパス試行プロジェクト 五島朋子
5	超高齢社会における芸術活動の可能性—高齢者の演劇活動を事例として— 五島朋子
6	埋もれた歴史に光を当て地域の誇りを蘇らせる —戦後鳥取で市民が作りNHKが放送したラジオドラマ— 岡村知子・榎木久薫・佐々木友輔
7	兵庫県北部における交流と交渉の地域調査 アレクサンダー・ギンナン
8	地方都市郊外におけるコミュニティ組織の成立要因—東西町地域振興協議会を事例として— 東根ちよ
9	ライオン大学コミュニティサービス学部子ども・若者ケア学コースでの養成課程の全体像— 地域学部学術交流協定推進に向けたプロジェクト— 畑千鶴乃・塩野谷斉・福山寛志
10	小売立地競争モデルの構築とシミュレーション 白石秀壽（地域学部）・三浦政司（工学研究科）
11	満足してもリピーターにならない！—制御焦点理論を用いた地域マーケティングの提案— 今城鮎里・藤原浩高（地域政策学科3年）
12	地域フィールド演習—豊岡市— 飯田菜生・石本愛美・釜田朋夏・神田くるみ・小林あまね・志茂春菜（地域創造コース1年） 下野夏海・新谷陽香・盛田実憂（国際地域文化コース1年）

〈鳥取大学・鳥取県との共同研究〉

13	鳥取県中部地震によって被災した石造文化財の保存対策調査 高田健一
----	-------------------------------------

〈地域学部附属子どもの発達・学習研究センターでの研究〉

14	小学1年生を対象としたT式ひらがな音読支援と多層指導モデルMIMの併用 赤尾依子・小林勝年
----	--

〈地域連携研究員による研究〉

15	農山村における準家族づくりの社会的実践と関係人口点検に関する研究 小林悠歩・筒井一伸
----	---

地域学研究会第9回大会



地域課題と知のクロス「私」と「地域学」

2018年 **11/24** ±

申込不要・参加無料

※参加の際に支援の必要な方は事前にご連絡ください

10:00～16:35 (9:30受付開始)
鳥取大学地域学部棟 5階 5160 講義室ほか

問合せ：鳥取大学地域学部庶務係 tel. 0857-31-5073

主催：鳥取大学地域学部

後援：鳥取県・新日本海新聞社・鳥取大学尚徳同窓会



基調講演

「ここで生きる」—いのちの場所を求めて—

内山^{たかし}節氏 (哲学者)

1950年生まれ。哲学者。1970年代に入った頃から、東京と群馬県の山村・上野村との二重生活をしている。現在、NPO法人・森づくりフォーラム代表理事など。主な著作に『内山節著作集(全15巻)』農山漁村文化協会、近著に『いのちの場所』岩波書店がある。



地域学研究会第9回大会 —「私」と「地域学」— 地域課題と知のクロス

学部長挨拶

鳥取大学地域学部長 藤井 正



今年度の大会テーマは「私と地域学」と致しました。地域学部必修授業「地域学総説」の今年度テーマと共通です。その趣旨は、「私」から発して「私たち」へとつながる、暮らしの場としての地域を見つめ直すことにあります。そのとき手がかりとなるのは、日常のなかで目にする風景であり、そのなかに起きている身近で小さな変化といえないでしょうか。そこには、人の想いや願いが形になっていく気配が感じとれるように思えます。ささやかであるかもしれないけれど、地域でうまれている確かな実践を、みなさまと語りあい学びあいたいと思います。

スケジュール

9:30 受付開始 (地域学部棟 5階 5160 講義室前)

10:00 開会挨拶・大会趣旨説明

10:30 **基調講演「ここで生きる」—いのちの場所を求めて—** 講師:内山 節^{たかし}氏(哲学者)

12:15 昼食, ポスターセッション

会場: 地域学部棟 5階踊り場、リフレッシュルーム

13:30 **パネル発表**

会場: 5160 講義室

●藤田 安一氏(ゆりかご保育園園長・鳥取大学名誉教授)



滋賀県に生まれる。京都大学大学院経済学研究科博士課程修了(博士・経済学)後、1993年鳥取大学に赴任。教育学部教授および地域学部教授を歴任し、2017年鳥取大学定年退職。専攻は経済学、財政学。現在、鳥取市認可家庭的保育事業「ゆりかご保育園」園長、鳥取大学名誉教授。

●福井 恒美氏(株式会社鳥プロCEOなど)



1957年鳥取県倉吉市生まれ。東京で商社に勤務した後、2006年倉吉へ帰郷し、地域コミュニティの再生と創造で地域振興を図る活動を開始。株式会社鳥プロCEO、realmac(社会的活動団体)代表、移動販売型地域支援プロジェクトくらよしカーゴマルシェ代表などを務めながら、家族のように喜びを分かち合う社会づくり(=大家族計画)のために“場づくり”と“コトづくり”を実践し研究を行っている。

●豊岡市への地域フィールド演習参加グループ

今年6月、鳥取大学地域学部1年次前期の必修授業である「地域学入門」で、豊岡市長による「小さな世界都市-Local & Global City-」の講義がありました。これを聞いた学生から募った10名と、同市のコウノトリとの共生や芸術文化の取り組みを研究対象としている教員が、9月に豊岡市を訪れ、その教員と学生の代表が成果を報告します。

15:00 休憩

15:15 **総括セッション**

会場: 5160 講義室

16:30 閉会挨拶

16:35 閉会

会場へのアクセス



鳥取大学
地域学部棟 5階 5160講義室他
〒680-8551 鳥取市湖山町南4-101

●お車でお越しの場合は、第1駐車場をご利用ください。受付時にサービス券を発行しますので、駐車券を会場までご持参ください。

2018年

11/24[±]

10:00~16:35

(9:30受付開始)



申込不要・参加無料

問合せ: 鳥取大学地域学部庶務係
tel. 0857-31-5073

※参加の際に支援の必要な方は
事前にご連絡ください